

内省と光明

『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その一

高橋克己

内容梗概

(一) 序論	二 (156) 頁―五 (159) 頁
(二) 有和の旋律	
(1) 頭韻と詩脚	六 (160) 頁―七 (161) 頁
(2) 内省する魂	八 (162) 頁―一 (165) 頁
(3) 生ける静謐	一 (165) 頁―一五 (169) 頁
(三) 燈火と松明	
(1) 生成と消滅	一六 (170) 頁―一七 (171) 頁
(2) 燈火と月影	一七 (171) 頁―二 (176) 頁
(3) 発酵と解体	二 (176) 頁―二八 (182) 頁
註解	二八 (182) 頁―四四 (198) 頁
Zum Verständnis dieser Arbeit	四五 (199) 頁―四七 (201) 頁

本研究は、昭和六〇年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A）学術成果報告書その二である。

課題番号 六〇七一〇二八四

研究課題 「パンとぶどう酒」の詩想展開を精神史、文化史、宗教史

などの多角的視野より考察究明

研究代表者 高橋克己（高知大学人文学部助教授、研究者番号 五三二

四二〇一七〇一三）

研究経費 昭和六〇年度 九〇〇千円

研究姿勢

『パンとぶどう酒』の詩想を究明するにあたり、本研究では主に次の両面からの考察を企図している。一つは思想史上の基本問題に留意して、詩想展開を西欧意識の淵源から掘み直すことである。他の一つは当時の社会や歴史背景など、心の外に映ずる現実の動きを踏まえて、この思想詩の内実を照らし出すことである。ところで、この意識の淵源と現実の動きとは、実は作品の詩歌象徴に巧みに織り込まれ、その内奥で分かち難く呼応し合っているのであるが、しかし本研究では論述の便宜上、この両面を各々の角度から眺めつつ相互連関させることを意図している。

例えば「燈火」とか「松明」などの詩歌象徴の考察に際し、本論としては韻律上や修辭上の概念を連ねる文体論や作品分析に留まらず、むしろ詩想が孕む律動の意味する所へと眼差を向け、とりわけ内省する魂に響く心の音を考量しつつ、更には響きが歴史上の社会にまで反響してゆく現実の諸相を探索したい。この際、思想詩の成立背景をなす十八世紀末の西南ドイツ領邦ヴェルテルムベルクの首都シュトゥットガルトを中心とする地誌が顧慮される。蓋しこの地誌とは単なる郷土誌に限定されず、広く当時の都市や宮廷の現状をも伝える資料であり、このような史実探求をも絡み合わせつつ、此所では『パンとぶどう酒』冒頭の理解を深めてゆこうと考えている。

(一) 序 論

縦に宗教が、不法にも圧制の下にある奴隷の慰めなる事が実であるとして、にも拘わらず何はさて措き宗教の心意 (Sinn) は、むしろこの奴隷状態に反逆し、もし阻止し得るならば、宗教をこの捕われ人の単なる慰めにまで貶めさせぬ所にある。なるほど専制支配者 (テュラノス) のお気に入りには、(既成) 宗教の云々恭順を説き、人々には現世で如何なる場も叶えさせずに、(ひたすら) 天国へと赴く道を指示することであろう。だが専制支配者ならぬ私達は慌てて、このテュラノス推薦の宗教観など身につけぬようにすべきであるのみならず、況んや天国へと増す憧憬を掻き立てるべく此の世を地獄と化すなど云う事を妨げねばならないのである。

(フイヒテ「ドイツ国民に告ぐ」一八〇七年—一八〇八年、第八講)

十八・十九世紀の転換点で成立したヘルダーリンの思想詩「パンとぶどう酒」は、表題から見て既に西欧意識には、自然と救世主キリストとの「最後の晩餐」を想わしめる。しかしながら成程キリスト者には自明なこの「聖餐 (Abendmahl)」も、凡そ古来の仏法と神道を国風とするわが国にあっては疎い事跡である。すなわち神仏混淆とさ言い得る温和な和風の宗教風土にありては、富国強兵を事とする隣国の如くキリスト教徒が多数を占める国柄とは趣を異にして、そもそも教会堂の中で「パンとぶどう酒」に出会う例が決して多くないからである。ところが反して、教育とか経済への熱意が政治軍事力に上回るわが国において、全体「パンとぶどう酒」との縁を結ぶものは、何より文化財たる芸術作品である。まずこの筆頭に上るのは、イタリーアの都市ミラノにある「恵みの聖マリア (Santa Maria delle Grazie) 教会」で參觀せざる、文芸復興 (ルネサンス) 絵画の巨匠レオナルドの名画「最後の晩餐」であろう。ここを遙々空路を経て訪問すれば、農協団体観光客であれ禅僧

であれ神主であれ、そもそも「最後の晩餐」における「パンとぶどう酒」とは何を意味するのかを考へざるを得ぬであろう。

次に絵画美術のイタリーアから音楽芸術のドイツへと目を転ずると、今日のわが国では音楽の門外漢でも口遊ぶ「マタイ受難曲」が念頭に浮かぶ。これは勿論十七世紀のシュッツ作「マタイ受難曲」ではなく、十八世紀のバッハ作「マタイ受難曲」である。恐らく今日では滅多に教会へ赴かない西欧キリスト教徒でも、復活祭や聖夜の折に会堂で催される演奏会 (信心深い人には祈りの一時) においてならば、長大なこの名曲を拝聴するのみならず、中には敢て合唱に加わり斉唱する者も居るであろう。わが国にこのような習俗は見られないが、遙々空路を経ずとも、画集でレオナルドの名画を鑑賞するように、気軽に日頃音響装置で「マタイ受難曲」を静聴するバッハの友がいることは確かである。すると自然と「最後の晩餐」の件が耳に留まり脳裏に刻まれることになる。

福音史家 だが弟子たちが坐ると、イエスはパンをとり感謝して割き、弟子たちに与えて語った。

イエス 取り食しなさい。これは私の体です。

福音史家 そしてイエスは杯を取り感謝し、弟子たちに与えて語った。イエス 皆で杯から飲みなさい。これは私の血で、新約のしるしです。

(ルター訳「新約聖書」「マタイ福音書」第二十六章、第二六節—第二八節)

実際にここで話題としているのが、決して講壇からの説教ではなく、何時とは無しに仏教徒にも素直に親しませる、巨匠バッハの手になる巧妙な諸音の調べにつれて、何処となく心に入るルター訳「聖書」の言葉である点に留意したい。もはや此所で「聖書」は原典たる古代ギリシア語でもなく、旧教カトリック教会公認ラテン語訳ウルガータ版でもない、他ならぬ宗教改革者ルターの近代語なのである。

私はまずこの脈絡を重視したい。実際に例えば宗教改革（一五一七年）後に開かれた第十九回公会議、すなわちトレント宗教会議（一五四五年—六三年）における第四総会（一五四六年）では、あくまで「正統派教父たちの範例に倣い（*Orthodoxorum Patrum exempla secuta*）」⁶、次のことが「聖書」に関して力説されていた。

決定され宣言されることは、この古来の公認（ウルガータ）版、すなわち久しく実に幾世紀にも亘りて正に教会での使用に適すると実証されたこの公認版こそが、公の講読、議論、説教や釈義の際に拠る所とされるべきことであり、更に如何なる理由であれ、誰もこの公認版を取て拒否したり或いは拒否しようと企ててはならない。

更にこの条項は十九世紀においても引き続き、ローマ教皇により再確認され、左記の如く強調され続けることになる。

実にローマ（カトリック）教会は、トレント公会議にてしかと記された規定により、公認（ウルガータ）版のみを受け入れ、他の諸言語への翻訳は承認しなかったのである。

（一八一六年九月三日付、モヒレフの大司教への教皇書簡）

とりも直さず「聖書」そのものが、

世界中が同じ言語であり、同じ言葉だった。

（『旧約聖書』「創世記」第十一章「バベルの塔」第一節）

と語っているからである。故に一五六四年に教会で公認された、トレント宗教会議に出席した代表団が作成した「禁書目録」のための公準^{レギュラ}の第四箇条では、こう書き始められる。

経験から明らかなことは、もし聖書が各国語に訳されて使用されるのを構わず無差別に許可するならば、そこからは人々の無思慮ゆえ益よりも害が多く

生ずることである。

詰まるところ正統派の權威主義が此所に明確な文章として提示されていると見ることが出来る。

ところで正統派の權威主義は、一重にニケア信条（三二五年）以来千数百年を経て培われ続けてきた旧教の伝統のみではない。実は既に宗教改革（一五一七年）以来ヘルダーリンの時代（十八世紀後半から十九世紀前半）にかけて約三百年の歴史を持たんとしていた新教においても、当然のことながら正統ルター派の權威主義は厳然と巖の如く申し掛かっていたのである。すなわち何語に訳されたとして、「聖書」の權威が他の作品を威圧せんとする特權を享受していたと言える。

専ら「聖書」の言葉（ロゴス）を静聴するため典礼音楽も奏でられたようである。例えば前述のシュッツ作『マタイ受難曲』（一六六六年）をバッハ作『マタイ受難曲』（一七一九年）と比べてみると、前者には後者よりも遙かに楽音が少ない事に驚かされる。つまり淡々と「マタイ福音書」の第二十六章と第二十七章を朗読するが如く叙唱が続く。聴衆は近代ドイツ語「聖書」の字句を一語一語と噛みしめつつ、イエス・キリストの事跡を辿るのである。

バッハの受難曲はこれと好対称をなし、「聖書」の記述は筋の展開を担う要素として背景に退き、代わりにその間に挟まれた合唱や詠唱が朗朗と淀みなく長々と歌われ、正にこの音楽家バッハの手になる芸術の音響こそが焦眉の急となる。とりわけ「聖書」の記述に疎く外国語に縁遠い仏教徒をも、何時とは無しに「マタイ福音書」の世界へと誘うのが、他ならぬこのバッハの芸術音楽なのである。この様はあたかも古典ギリシア悲劇に似ており、筋の展開を辿る地の文である「聖書」の言葉（ロゴス）とともに、負けずとも劣らぬ真迫力に溢れて合唱や詠唱が基底の神話（ミュートス）世界の精髓を形造るのであり、正にこの抒情と叙事

が巧みに織り成す明暗の下に始めて神人キリストの真意が問われつつ、敢て宗教と云い得る敬虔なる心の浄化(カタルシス)へと大(いなる慈)悲を湛える「畏怖と并厳」なる受難(パトス)の神曲(Divina Tragedia)が形造られてゆくのである。

ヘルダーリンの思想詩「パンとぶどう酒」もこの「マタイ受難曲」の芸術表現に似て、「聖書」の字句通りイエス・キリストを歌いあげているわけではない。そのみならず一応「パンとぶどう酒」と表題がキリストとの「聖餐」を指し示しているにも拘わらず、実はキリストが果して歌われているのが否か決め難い程に微妙な詩歌象徴の調べに乗り、断言などと云うよりはむしろ問いかけ(Fragen)の形式の中で「神自身」が話題となるのである。

或いはもしかすると神自身もまた来臨し、しかも人の姿をとり、(至福なるギリシアでの神々による)天上の祝祭を終結し宥和したのだ。

「パンとぶどう酒」第六節、第一〇七句—第一〇八句)

しかも此所に意味上から敢て「神」と訳した所が、実は原典で人称代名詞三人称単数で「彼(エア)」とあり、文脈上は二句前の「或る神(アイ・ゴット)」を留意せざるを得ない。

一〇五 なぜ(キリスト教西欧の時空では、)丈夫の額に或る(ポイボス神アポロンの如き)神が、
古典古代の如く悲雄の烙印を撃たぬのか?

「パンとぶどう酒」第六節、第一〇五句—第一〇六句)

このように思想詩のキリスト像は、「至福なるギリシア」の「至福なる神々」による「天上の祝祭を終結し宥和した」神性として考量される。しかも思想詩の全九節百六十句のうち中央部を占める第四節から第六節、つまり第五句から第一〇八句にかけての詩節において、その第一〇六

句まで朗々と「至福なるギリシア」への讃歌が奏でられた言わば付け足しとして、「或いはもしかすると神自身もまた」(第一〇七句)と始めてキリストが問われているのである。

実に思想詩全体の六割をも過ぎた三分の二ほどに達し、漸く竟に「パンとぶどう酒」の焦眉の急キリストが歌い出されたと言える。この間「聖書」の字句は一切黙して語られていないのであるが、全く押しつけがましくも説教臭くもない思想詩第一〇七句のキリスト像が、「マタイ受難曲」のイエス像に劣らぬ真迫力を以て語りかけるのは、一人東海の信徒のみならず恐らく西欧キリスト者においても同様であろう。すなわち普遍性を獲た一回限りの芸術表現の働きが「聖書」から離乳したのである。

これに反して、ヘルダーリンの先師クロプシュトック(一七二四年—一八〇三年)が「救世主(キリスト)」を歌い出した折は、事情が百八十度転換した胎動期であった。

だが、おお作品よ、ただ(唯一なる)神のみが遍く知ろしめす(作品よ、)
敢て詩歌芸術も恐らく暗闇の彼方遠くから汝に近寄るのを許されるだろうか?

「救世主」第一歌、一七四八年、第八句—第九句)

「マタイ受難曲」や「救世主」の場合には、「聖書」に述べられたキリストの事跡こそがまず「作品」の原型であった。ところが思想詩「パンとぶどう酒」では言わば百八十度コペルニクスの転回を遂げ、「作品」の原型が、外から或いは上から「聖書」として与えられるのではなく、むしろ「言わば内面から理知に適う道を歩み」(シラー)ながら誕生して来るのである。

もはや教養人独占の公認ウルガータ聖書のみならず、「聖書」そのものからも離乳して、新たに大地ゲルマニアの風土に根ざす母国語を以て、他に翻訳し得ぬドイツ語の調べが奏でられる。正にこの地盤から思想詩のみならず、「ドイツ国民に告ぐ」(註(一))も語り出された

と考えられる。この際「カントがドイツ国民のモーセである」⁽¹⁹⁾ (三) (22) (参照) ことに異論はあるまい。すなわち東海の仏教徒にも十分納得のゆく「理性の自由な公然とした吟味に耐えたものだけにのみ理性が認可する」⁽²⁰⁾ (純粹理性批判) 第一版、一七八一年、序文) と云う「言わば内面から理知に適う道を歩み」(註(18)) 始めた先覚として、所謂カントの思考上でのコペルニクスの転回⁽²¹⁾が重視されるからである。

カントに始まるこの新たな理念追求(イデアリスムス)においては、先に引用した「ドイツ国民に告ぐ」第八講でフィヒテが力説しているように、「宗教の心意は、奴隸状態に反逆し」(註(1))、既成の諸価値を「批判(Kritik)」し「吟味(Prüfung)」しつつ、上や外からの権威に依らず「言わば内面から理知に適う道を歩み」(註(18)) ながら自己(アウト)立法(ノモス)の表現を獲ることである。これをカントの言葉で「啓蒙(Aufklärung)」と云う。すなわち「啓蒙とは、人が自ら自身に責任がある未熟から出て成熟することであり、……果敢なる叡知人間(ホモ・サピエンス) たれ! 勇気もて君自身の知性を主體的に行使せよ! ——これがつまり啓蒙の道標なす言葉なのである」⁽²²⁾ (「啓蒙とは何か?」に於いて) 一七八四年)。

思想詩「パンとぶどう酒」は、このカントの云う意味での「啓蒙」の成果と考えられる。これは決して「正統派教父たちの範例に倣い」(註(6)) て語られてもおらぬし、ましてや「聖書」の權威など物ともしていない。「唯一なる神のみが遍く知らしめす作品」など、「至福なるギリシア」の「詩歌芸術」(註(17)) に比べれば、思想詩「パンとぶどう酒」では大して顧慮されていない。しかれども「詩歌芸術」とは此所で「為になる(prodesse)とか楽しませる(dellectare)」⁽²³⁾ (ホラーティウス「詩論」第三三三句)と云う俗な意味での「啓蒙」に係わっていない。それはむしろこの両者の限定から自由な「判断力批判」(カント)における「美」⁽²⁴⁾の理念と深く結びついているのである。

この「美」を「現象(Erscheinung)における自由」⁽²⁵⁾として擲んだシラーは、一七九三年二月二十三日付ケルナー宛書簡でこう語る。

自由であること、自然に定まること、内から定まること、これらのことは一如であります。

【カリアリス書簡(美について)】

此所にヘルダーリンが「パンとぶどう酒」を歌う際の姿勢が明示されていると見ることが出来る。權威や正統派の筋書きどおり神父や牧師のように語るのではなく、内から自然と沸き上がる心情において敢て「敬虔」と云い得る「ドイツの詩人」の「魂の歌声(Seelengesang)」⁽²⁶⁾を奏するのである。

私達の胸中の清浄にて波立つ心魂は、

より高き一層と清らかな知られざる者へと

感謝の念から自由な意志で自己を捧げんと努め、

この永遠に名づけられぬ者を自らに解き明かすのだ。

これを私達は「敬虔である!」と云おう。

(ゲーテ「悲歌」第七九句―第八三句)

思想詩「パンとぶどう酒」の基調も、此所に云う「自由な意志(freiwillig)」に基ずいた「敬虔」に根ざしており、この祈りの底において、

……ひそやかに尚いくばくかの感謝が生きている。

【「パンとぶどう酒」第八節、第一三六句】

と慎ましくも厳そかに歌われている。まず詩人が思想詩冒頭で歌い出す「ひそやかに燈火の光(Erleuchtung)」⁽²⁷⁾がとる街路」と「静かに安らう都市(Rings um ruhet die Stadt)」⁽²⁸⁾に宿る「生ける静謐(die lebendige Ruhe)」⁽²⁹⁾ (三) (3) は、正にこの止み難う「敬虔」なる「感謝」に根ざしていると考えられるのである。

〔二〕 宥和の旋律

(1) 頭韻と詩脚

詠まれた内容に関して思い廻らす前に、既に読者の内耳に響き渡るのが詩歌象徴の調べであろう。この点、思想詩「パンとぶどう酒」冒頭においても事情は変わらない。例えば此所では、頭韻の反響が印象深く思われる。

- 一 Rings um ruhet die Stadt, still wird die erleuchtete Gasse.
- 二 Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.

- 一 静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともり、
- 二 して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。

(「パンとぶどう酒」第一節、第一句―第二句)

まず詩歌冒頭で《Rings》と《ruhet》との語頭を飾る音価〔r〕に続き、第一句中央に韻律上の中間休止(カエスーラ)を挟んで反響し合う《Stadt》と《still》との頭韻〔st〕、更に第二句中央で中間休止に跨がり呼応する《geschmückt》と《rauschen》の摩擦音〔sch〕、最後に第二句末を印象づける《Wagen》と《hinweg》とに共通な子音〔w〕を例示することが出来る。

とりわけ以上の音響の中で〔ru〕は、引き続く第三句と第六句でも繰り返して、第一句から《... ruhet ... ruhen ... ruht ...》と歌い継がれ、思想詩冒頭の基調なして「安らぎ(Ruhe)」の旋律を奏でる中で、第五句の冒頭で「悠然と和やかにくつろぐ(Wohlfrieden)」と高

潮を成すのである。

- 三 Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
- 四 Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
- 五 Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen,
- 六 Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.

- 三 満ち足りて家路へと、昼間の歎びに別れを告げ、安らぎを求めて歩

- 四 みゆく人々。

- 五 して収支得失を慮る思慮深い家長は

- 六 悠然と和やかにわが家にくつろぐ。(黄昏の今は)葡萄も花束もな

- 六 して手仕事の品々もなく安らう、(昼間は)忙しき広場の市場。

(「パンとぶどう酒」第一節、第三句―第六句)

此所で「安らぎ(ルーエ)」の動機に乗り、憩いの場として詩想が向かうのは、「思慮深い家長(Haube)」(第四句)が「悠然と和やかにくつろぐ」「わが家(Haus)」(第五句)である。この箇所にも印象深く頭韻が句に跨がり動き、「ハップト(家長)」(第四句)と「ハウス(わが家)」(第五句)が相互に〔Hau〕において反響し合う中で、文字通り第五句頭において「悠然と和やかにくつろぐ(ヴォール・ツィ・フリーデン)」と歌い上げられているのである。

かくの如く思想詩冒頭の響きを特徴づける頭韻は、ローマやイタリアの南欧文学によりは、むしろ古代ゲルマニア以来の北欧詩歌に特有の表現様式と考えられる。例えば、古代北欧神話「エッダ」の冒頭を飾る「巫女の予言」第四節の例を左に引こう。頭韻〔er〕が句に跨がり三度連なり反響する。

þá var grund grœin groenom lauki.

すると大地には草木深き緑が萌えた。

(「巫女の予言」第四節、第七句―第八句)

別に敢て古文を引かずとも、例えば十八世紀以来人口に膾炙されたクラウディウス（一七四〇年—一八一五年）の「夕べの歌」（一七七九年）にも、頭韻の調べは〔w〕と〔schw〕とをなして美しく反響している。

Der Wald steht schwarz und schweiget,
Und aus den Wiesen steigt
Der weiße Nebel wunderbar.

森は 黒々とたち ひっそりしています。
草はらからたちのぼる
白い霧は なんとすばらしいのでしょうか。

（「夕べの歌」第四句—第六句）

北欧系の言語ドイツ語は、多く語頭に強声力点を有し、これとは反対に文末や語尾へと重心がかかる南欧系の言語フランス語と好対称をなす。故に脚韻よりも、頭韻が際立つことになるのも自然のことと思われるのである。

ところが中世以来ドイツ詩歌の韻律は、例えば「ニーベルンゲン詩節（Nibelungenstrophe）」とか「ミンネザング詩節（Minnesangstrophe）」に見られるように脚韻を旨として来ており、この点では「民謡詩節（Volksliedstrophe）」でも事情は変わらないと言える。この脈絡で興味深いのが、十八世紀中葉を物語るゲーテの伝記における次の件である。

わが父は脚韻を詩歌作品の必須と看做していた。カーニツ、ハーゲドルン、ドロリング、ゲレルト、クロイツ、ハラが、綺麗な総皮装幀で一例に並んでいた。……これに反し当時わが父には不愉快な時代が始まり、父には何ら詩歌とは思われなかった詩句が、クロプシュトックの「救世主」（の出現）により、称賛的となったのである。

（「詩と真実」第一部、第二書）

父ゲーテに代表される既成の判断によれば、クロプシュトックの「救世主」における六歩脚（ヘクサメトロン）詩型の如く脚韻を持たぬものは詩歌でないことになる。

ところが「救世主」は既成の観念を破り、敢て脚韻を踏まず、代わりに六歩格の詩脚を古典詩歌から学んだ。古典とは就ずく脚韻なき古代ギリシア詩文を指す。例えば、「救世主」（第一歌—第三歌）発表に先立つ前年、クロプシュトックは「古代ギリシア人の弟子」（一七四七年）と題す第二アスクレピアデース詩節による無脚韻詩を創作し、古代ギリシア伝来の詩脚で以て詩作する姿勢を強く打ち出しているのである。この先例を範とし、思想詩「パンとぶどう酒」冒頭の第一句は「イリアス」以来の六歩脚（ヘクサメトロン）詩型で以て悠然と奏で始められる。

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,

— — — — —

引き続き第二句は蓋し五歩脚（ペンタメトロン）詩型となり、中間休止（ニ）後に律動は返す波の如く彼方へと引いてゆく。

Und, mit Fakeln geschnüht, rauschen die Wagen hinweg.

— — — — —

以上の六歩脚と五歩脚とを組み合わせた対句（デイスティコン）を「エレゲイオン詩脚」と呼ぶ。だが此所で肝要なのは「エレゲイオン（エレギー）」と云う名辞により喚起される「悲歌」への連想と云うよりは、むしろ脚韻を踏まず古典ギリシア以来のエレゲイオン詩脚で以て「パンとぶどう酒」が歌われてゆくと言う事であり、かくして「至福なるギリシア」（二）（15）へと向けて地ならしが既に始まっている点なのである。

(2) 内省する魂

「静かに安らう都市 (Rings um ruhet die Stadt)」(二二)(1)(1)と「パンとぶどう酒」冒頭は実に然りげなく始まる。ところが読者には何気ないこの冒頭が、興味深いことに詩人には容易に事も無げに歌い出され得なかったようである。この事実を物語るのが詩人の自筆草稿であり、この原稿の複写は今日フランクフルト版ヘルダーリン全集の第六巻に収められている。この歴史批判版所収の第十四手稿(一頁)に依ると、冒頭の部分(第一句前半)が欠けたままで当初は第一節が成立したと考えられる。

Gasse
wird die erleuchtete
still
Und mit Fackeln geschmückt rauschen die Wagen hinweg

ここに欠落している冒頭「静かに安らう都市」が書き加えられるのは、別の第五草稿(五頁)⁽²⁾においてである。

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und mit Fackeln geschmückt rauschen die Wagen hinweg.

まずこの冒頭の留保について考えてみたい。

これに対して有益なのは、フランクフルト版に示された草稿成立の過程である。すなわち草稿に始めて記されたと見られるのは、「夜」に関する断想で、それは第十四草稿一頁の上から三分の一ほどの右側にこう現われた。

und die schwärmerische,
die Nacht steigt
prächtig und traurig herauf

やがて詩想が膨らむとともに、この断想はまず数行下に移し換えられ、更なる構想展開において竟に草稿上方から三分の二の所へと書き直された。つまり「夜」に関して詩想は予定を上回り倍増したと考えられるのである。

実際ゼッケンドルフが「詩神年鑑」(一八〇七年)において始めて「パンとぶどう酒」第一節を公刊した折に「夜 (Die Nacht)」を表題に択んだことから察せられるように、何よりまず第一節で瞳目すべきが「夜」の詩想であろう。右に示したように確かに詩人自身もこの「夜」の断想を膨らませつつ構想を拡げたと考えられる。成程かく「夜」が第一節の主題であることに相違はないが、しかしながら「夜」の詩想展開により遠心方向に膨らみ高まりゆく心象風景にばかり気を取られていては十分であるまい。つまり実は同時に求心力を獲て内面へと深沈しつつ省察する静かな無言の歌声が悠然と目立たずに流れ続けており、正にこの内省の律動を決定ならしめて竟に第一節を締め括らんと「静かに安らう都市 (Rings um ruhet die Stadt)」が最後に歌い出されたと考えられるのである。

故に決してこれは「都市」の描写などではなく、「都市が静かに安らう」と歌う内省する魂の肉声と看做され得よう。魂の歌声とは、常の音ならぬ音を静かに聴く心の響きであるとも言える。とりわけ此所で、当該の思想詩の主題が「パンとぶどう酒」(一一)(4)である事を思い起こしても無駄ではあるまい。すなわち救世主キリストに繋がる「パンとぶどう酒」とは、決して日常の食事などではなく、靈魂の安らぎ、ルーエ)の糧に他ならない。

Ruhe sanfte, ... sanfte ruh!

ルーエ・サンフテ… サンフテ・ルー! (7)

バッハの『マタイ受難曲』は、かく「優しき(サンフテ) 安らぎ(ルーエ)」を喚び覚まして心を浄めつつ、静かに悠然と流れてゆく祈りの合唱で閉じられている。

受難曲はキリストの事跡を回顧しつつ「安らぎ」を歌うのであるが、しかし思想詩は未だ過去を振り返ることなく、現在の只中において「都市が静かに安らう(Rings um ruhet die Stadt)」と歌っている。すなわち受難曲に見られるような魂の内省の終わる所から、思想詩における内省する魂は歌い出すと言える。つまり『聖書』に纏わるキリスト者の回想を表題「パンとぶどう酒」で踏まえつつ、既成の聖書神話から離乳した新たな世界観が胎動し始めつつ詩歌の調べを奏で出すのである。

此所で詩人が内省の場として選ぶのは「都市」、詳しく云うと当時の市壁に取り囲まれた「市街」と言う内部(Innen)空間である。この世界空間から思想詩はあくまで響き始めるのであり、決して描写したり叙述しようとするのではない点に留意したい。そして響きに静かに耳を澄ましつつ、第一句における中間休止(…)前後の頭韻(st)に眼を落としてみよう。《… Stadt; still …》と響き合う澄んだ清音な摩擦閉塞音([t])が、文字通り「密やか(still)」に読者の内耳に囁く。この私語の意味する所は、欧語で《innig: intime》と表現できよう。これは石材で堅固に築き上げられた西欧都市に特有の緊密(innig)さと協和し合う親密(Innigkeit)さと考えられ、この緊密で親密な内面(Innen)空間から、密やかに思想詩が悠然と響き始めて来る。勿論読者の表象の仕方は直接歌われている対象に捕われず自由であり、例えば黄昏に憩う都市の石造建築に映える月影を想像しても無駄ではあるまい。

とにかく月影(Mondschein)の《… dsch …》に宿る閉塞摩擦音([ʃ])も《… Stadt; still …》で頭韻なす([st])と微妙に反響し合うのであるから尚更のことであろう。

かく密やかで親密(Innigkeit)な世界内空間で深沈する魂の内省(Verinnerlichung)に方向づけるのが、思想詩冒頭の歌い出し《Rings um ruhet die Stadt》の響きである。すなわち、この冒頭が響き出すや否や、読者の心眼が開き内なる省察が始まると言える。しかもこの魂の内省は既に述べたように、既成の聖典による礼拝の終わる所から、当面は過去を振り返ることなく目下の現実から始まる点に留意したい。もはや祈りの場は聖堂の中に限定されているのではなく、日常生活の只中に開かれて来る。此所に正に宗教改革以来の精神が息吹いていると見る事ができるのである。

この観点から興味深く思われるのが、思想詩の第六句に見られる詩歌象徴である。

…… ruht der geschäftige Markt.
安らう(昼間は) 忙しき広場の市場。

此々で「市場」が歌われている事から、話題の都市像は日祝祭日ではなく週日と考えられる。週日にも夕暮にカトリック教徒は教会へ祈りに赴くが、新教プロテスタントでは休日以外に夕方は礼拝を行なわないのが普通である。『パンとぶどう酒』を歌う詩人ヘルダーリンが領邦ヴェルテルベルク(シュヴァーベン)生まれの新教徒であった事は此所で想い起こして然かるべきであろう。更に云えば、詩人は少年時代から牧師となるべく教育を受け、名門テュービンゲン神学院をまで卒業(一七九三年)したのであるが、公僕として型通りの聖職を勤めるのを拒み続けたのである。

詩人の収入源は住込み家庭教師としての生業であったが、当該の思想

いと言ひ得る。かく敢て現世を謳歌するわけではないが、慎ましくも厳
 そかに日常性を見守る『パンとぶどう酒』冒頭の夕暮の情緒は考えてみ
 るに、『夕べの歌』のように「(既成) 宗教の云々恭順を説き」(一)
 (一)、在来の封建秩序に組み込まれゆく「この地のうえで、子供のよ
 うに 敬虔で楽しく暮ら」(第二九句—第三〇句) すに肯ぜず、「むしろ
 この奴隷状態に反逆し、もし阻止し得るならば、宗教をこの捕われ人
 の単なる慰めにまで貶しめさせぬ」(一)(一)と説くフィヒテの思
 想圏に繋がるものであり、この理念追求(イデアリスムス)の息吹きを
 心に孕んで内省する魂の歌声と看做され得るのである。

(3) 生ける静謐

これ迄見てきた内省する、魂の方向を定めるべく熟慮をへて響き始めた
 思想詩冒頭の動機《Rings um ruhet die Stadt》を更に以下詳しく考
 量するとしよう。まず歌い始めの副詞「遍ねく(ringsum)」に注目する
 と、これが『パンとぶどう酒』冒頭では二語で《Rings um》として現
 われる。ところで、この二語へと分離して表記することをヘルダーリン
 が常としていたわけではなかった。例えば一八〇〇年迄のヘルダーリン
 初期の詩歌作品には、この二語への分離は見られず、常に一語で《Rings-
 um》と表記されている。⁽¹⁾興味深いことに一八〇〇年以降の後期詩歌とな
 ると事情は逆で、専ら二語に分離された《Rings um》のみが使われてい
 る。考えてみるに『パンとぶどう酒』において敢て詩人が、冒頭の副詞
 を二語に分離して《Rings um》と表現するには、恐らく何らかの意味
 が有りはしまいかと思われるのである。

まず律動の点から思想詩第一句が取る六歩脚(ヘクサメトロン)詩型
 を考えてみるに、まず英雄叙事詩『イーリアス』の歌い出しが範となる

一六五 『パンとぶどう酒』第一節「聖なる夜」その一(高橋)

と思われる。

M̃ññu deide, deid,
 — C — C — C —
 (メーニナ・エイデテ・アー……)
 õũlõm̃ẽññ, ñ
 — C — — —
 (ウーロメ・ネーネー……)
 põllãs d̃ ĩph̃ĩmõus
 — — — — —
 (ポルラー・ス・ディーフティ・ムー・ス……)⁽³⁾

(『イーリアス』第一歌、第一句—第三句)

右の範例で解かるように、六歩脚詩型の冒頭は、通常ダクテュロス(—
 C C) かスポンディオス(— —) を取ると云える、ところが十八世紀の
 クロプシュトック以来のドイツ詩歌においては、加うるにトロカイオス
 (— C) も許容されていたと見られる。

Satan wider den göttlichen Sohn;⁽⁴⁾
 — C — C — C — C — —
 (『救世主』第一歌、一七四八年、第六句)
 Selig, welchen die Götter,⁽⁵⁾
 — C — — C — C — C —
 (シラー『幸運』一七九八年、第一句)

この他ゲーテの『植物の変態』(一七九八年) 冒頭にも同類の先例が見
 い出せる。

これらの可能性の中から『パンとぶどう酒』冒頭にあてはまることが
 出来るのは、スポンディオス(— —) かトロカイオス(— C) である。

なぜなら、「遍く(Rings um)」に引き続いて歌われる「安らう都市(ruhet die Stadt)」の箇所が明らかにダクテュロス(—CC)で「ルーエット・ディ」と締め括られるからである。そこで更に《Ringsum》の発音を調べてみるに、『グリム独語辞典』のような古い辞書には発音上の指示が得られないので、近年の辞典を参考にすると、例えば「大ドゥーデン」第六巻『発音辞典』では「リンクス・ウム」と二度重ねて強く読む。これに対して『ヴァーリと独語辞典』では後方の《um》にのみ力点があり「リンクス・ウム」と指示されている。博友社『大独和辞典』には、この両者の可能性が共に記載されている。以上から興味深いことに、《um》が軽く読まれることは無いと解し得る。従って思想詩冒頭《Rings um》はスポンディオス(—)で、二度重ねて強く「リンクス・ウム」と朗読すべきと結論できよう。ところで、この聴覚上での小辞《um》への強声を留意する時、《Ringsum》と一語で書かれるよりも、むしろ《Rings um》と分離して表記され、《um》の独自性が判然と視覚上でも確かめられる方が、視聴覚相俟って適切に律動スポンディオスが認められ得ると考えられるのである。

引き続き思想詩冒頭の動機「安らぎ(ルーエ)」が響きとなる。

... ruhet die ...
(...ルーエット・ディ...)

この「安らぎ」の音響で基音となるのは「ルー(ruh-)」であるが、実はこの《r》と《u》とは共に先行する歌い出し「リンクス・ウム(Rings um)」に含まれ、既に強声を併ない十二分に口籠られていた子音と母音と考えられ、この両者が一体となり動詞「ルーエット(ruhet)」において「安らぎ(ルーエ)」の動機を明瞭に奏でると言える。

ところで動詞の活用形は別に「ルート(ruh)」を取り得たとも思われる。しかしながら「ルート」では決して「ルーエット」のようには、

「安らぎ(ルーエ)」の動機が十全に響かないと言える。すなわち曖昧母音《e》が加わることにより、先行する「ルー(ruh-)」の音響が一層と力強く開かれ充実して反響すると考えられるのである。故に仮に此所を《... ruht nun die ...》と表現するとなると、一応詩脚だけはダクテュロス(—CC)で揃いはするけれども、一向に「安らぎ」の動機が響かない、散文表現に過ぎない事になるであろう。

かくして「安らぎ」の動機は「ルーエット」を根幹動詞として、「リンクス・ウム・ルーエット・ディ・シュタット」において響き一旦中間休止を迎えることになる。この際に音調の流れに留意してみると、此所では下方から上方へではなく、逆に上方から下方へと降り往くと読み取れる。詳みに平声で流れゆく自然詩の「安らぎ」と対比してみよう。

Über allen Gipfeln.
Ist Ruh.

なべての峰に

安らぎあり、⁽⁹⁾

(「ゲーテ『旅人の夜の歌』第一句—第二句)

Rings um ruhet die Stadt; ...

両詩とも歌われた対象を描写しているとは思われない。そうではなくて心に在るのは歌の調べであり、この音調の響きにおいて内省する、魂の動静が浮き彫りにされていると読み取れるのである。

蓋し心の動きは歌われている対象の在り方に呼応している。確乎として抜くべからざる自然の懷に「安らぎあり(Ist Ruh)」と歌う「旅人の夜の歌」の場合は、平声の調べが揺らがない大地の鎮静した佇まいに憩う魂の在り方を物語る。これとは異なり「パンとぶどう酒」冒頭は、

人間を象徵する「都市」が夕暮に憩いゆく動静を示す。すなわち静かではあるが同時に動いている。この動きは例えば第三句に云う、「満ちたりて家路へと、昼の歎びに別れを告げ、安らぎを求めて歩みゆく人々」に、或いは「安らう、(昼間は)忙しき広場の市場」(第六句)に見い出されるような、「昼」の動きを包みこむ「夜」の静けさの中に在る内省する魂の動静なのである。

この静かではあるが同時に静止ならざる動静を示す或る割り切れない心の動きに相応して、思想詩冒頭は次第に下降する音調の流れ「リンクス・ウム・ルーエット・ディ・シュタット」において、徐ろに静まり、ゆく動きを示していると言える。そして正にこの動きが静寂の動静を告げるのであり、もはや静とも動とも決められない或る意識の流れが形造られることになる。これに反して「旅人の夜の歌」の「安らぎ」は、評釈に云う「全き静けさ (the perfect stillness)」(ウィルキンソン註)に終始し、或る絶対とも云い得る者の腕に抱かれるが如き安心立命を魂は期待できるのである。

ところが、このような「絶対の静寂 (un silence absolu)」が寂寥感 (la tristesse) を誘い、死の姿を覗かせる」と、老ルソーは「孤独な散歩者の夢想」で厳しく自己省察する。実際マールの報告(一八三一年八月二十七日)に依ると、若年(一七八〇年)の自作「旅人の夜の歌」を再読した老ゲーテ自身が正に「死の姿を覗か」ざるを得なかったのである。

すべての峰に
安らぎあり、

……
待てしはし、やがて
安らぎは汝をも訪れん。

一七八〇年九月七日 ゲーテ

この短詩に目を通すと、ゲーテの頬には涙が溢れた。……

明らかに老ゲーテは短詩結句「待てしはし、やがて安らぎは汝をも訪れん (Warte nur, balde / Ruhest du auch.)」を、「やがて死が汝にも訪れる」と読み取り、自らの創作を老いた体験で実際に身を以て確証したと思われるのである。

かく「死の姿を覗かせる」が如き「全き静寂」(註(11))に抗して、老ルソーは湖の静かな水面に「寄せては返す」「波の響き」を対置させ、この自然の慎ましい動静が内省する魂において「内面の運動にかわり」ゆく現存了解へと目を開く。すなわち、これが静かに心を動かす「ひとつの単純な変わらない状態なのであって、そこには激しいなものもないが、その持続は魅力を増大させ、やがてそこに至高の幸福をみいだすにいたるのである」(註(12))。このような静中の動あるいは動中の静なす「安らぎ」の律動として、「パンとぶどう酒」の対句(ディスティコン)は考えられよう。具体的に云うと、六歩格(ヘクサメトロン)と五歩格(ペンタメトロン)の詩脚(二)(一)(1)(6)が、あたかも「寄せては返す波の響き」のように相互に織り成しつつ心の襞を形造りゆき、「その持続は魅力を増大させ、やがてそこに至高の幸福 (la suprême félicité)」なす「至福なるギリシア! (Seeliges Griechenland!)」(第四節)へと到るのである。

詩人自身が讃歌「バトモス」冒頭で巧みに表現したように、「至福」へと至る道は「近いのだ。しかもそれ故に把握し難い (Nah ist / Und schwer zu fassen ...)」と言えよう。従って余りに勢い込んで迫ると離れゆく一方であるし、逆に全き諦観の静寂は「寂寥感を誘い、死の姿を覗かせる」(註(12))に過ぎない。ところが十八世紀後半期の疾風怒濤なす浪漫感情は、この間を激しく揺れ動いていたようである。例えば「パンとぶどう酒」と同じく六歩脚と五歩脚が織り成すエレゲイ

オン対句(ディステイコン)詩型の代表作においても、「私」に依る主観性に色濃く潤色された全一感が、古典古代を求めて疾風怒濤に胸ふくらむ心の高波を打ち寄せるのである。

Saget, Steine, mir an,

語れ、石よ。そそり立つ館の群れよ、口を開け。

街よ、一言、語れ。守護の靈よ、おんみは動かぬのか。

いや、永遠のローマよ、おんみの聖なる城壁の中で、すべてのものは

生気に満ちあふれているのに、私にだけまだ一切が口を閉ざしている。

五 誰かそつと言ってくるだろうか——私の身を焼いて蘇らせてくれる

やさしい人の姿が、いつか見られる窓は何処か、を。
私にはまだ隠されているのか——大切な時を費やしてしげしげとその人のもとに通うのであろう道は。

(ゲーテ『ローマ悲歌』第一歌、第一句―第八句)

僅か冒頭八句であるが、ここに実は七回も「私」が原典では登場して来る、和訳は抑制気味に三回しか訳さず、半数を上回る四度も直訳するのを控えているが、再びその点を補いつつ読み返してみると、「(私に)語れ、石よ。……私にだけはまだ一切が……誰か(私に)にそつと言ってくるだろうか——私の身を焼いて……いつか(私に)見られる窓は……私にはまだ隠されているのか——(私が)大切な時を費して……」と主情の流れが、我と汝との対峙を糸にして数珠つなぎに成っているのが解かる。他方これと好対称なして、一言も「私」が現われず淡々と歌い継がれる「パンとぶどう酒」冒頭の都市像(二)(2)(1)―(2)と比べてみる時、一層と此所には顕著な解き放たれた自我意識の発露が見い出されるであらう。

正に「感情が全てなのだ (Gefühl ist alles)」(ゲーテ『ファウスト』第三四五六句)と表明し得た高揚感に溢れた啓蒙思潮の充実期、すなわちドイツでは所謂ヴァイマル古典主義(一七九四年―一八〇五年)盛期へと高まりゆく時代に成立した『ローマ悲歌』(一七八八年―九〇年)において、疾風怒濤な主情が古典古代を求める浪漫感情として吐露されるのも不思議ではない。だがこれとは正反対に一見この生の躍動に反するかの如く、外見ドイツの後進性による現実からの逃避を伝えるように、『パンとぶどう酒』冒頭は静かに内面世界を目指し深沈しつつ響き始める。

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
静かに安らう都市。ひそやかに街路に燈火がともし、

蓋し此所で「密やかに点る燈火の光 (Erleuchtung)」は、専ら内界へと閉じ自己の殻に籠る主情の炎ではない。もし内観に閉じた空想の所産ならば、「数をまし膨らむ鬼火 (die irren Lichter, / Die sich mehren, die sich blähen)」(『ファウスト』第三九一〇句以下)として倦むことなき自我の帝国拡張を目指すファウストの如く悪魔とも手を結ぶであらう。

これに反して『パンとぶどう酒』冒頭の「燈火の光」は、むしろ敬虔(ピエタース)なる祈り(レリギオー)の光明 (Erleuchtung) に他ならない。但しこの祈りの光明は本論が再三繰返すように、「不法にも圧制の下にある奴隷の慰め」などではなく、敢て「むしろこの奴隷状態に反逆し、もし阻止し得るならば、宗教をこの捕われ人の単なる慰めまで貶めさせぬ」(二)(1)とする理念追求(イデアリスムス)なす精神の光である。しかもこの理念追求は、無限なる自我の浪漫風空想へと拡散せぬために、焦眉の急たる「至福なるギリシア」(註(15))を確乎として抜くべからざる古典の道標として、竟には「神自身」たる

神人キリスト像(一)(13)をも歌い上げんとするのである。

表題「パンとぶどう酒」が既に神人キリスト像を予感させる。すなわち詩人は思想詩冒頭において、そもそも描写とか写生のみならず、赤裸な心魂の表出や自我意識の吐露をも肯せず、神人キリスト像の如く心の内なる観念性の高い理念(イデー)を竟には一層と自然に歌い出さんとして、心情吐露を謹厳に慎しみ「私」を一切黙して語らず、恐らく十分に意図して自らの内に宿る古典古代への情熱(パトス)とは、一見して疎遠な人倫(エートス)の素材を選んだと考えられるのである。

疎遠な形式は疎遠であればある程、より生き生きと働きかけるに違いない。すなわち詩歌作品中の目に見える素材が、その基底にある素材である詩人の心情や世界に対して似ても似つかぬものであればある程、精神、すなわち詩人が自らの世界で感得した神性が、詩歌にあらわれる疎遠な素材の中において、より明確に表出され得るのである。

このようにヘルダーリン自身が、美学芸術論文『エムペドクレースの基底』(一七九九年)で論述している方法を踏まえると、思想詩冒頭の歌い方が一層と理解し易くなると思われる。かくして詩人は、「近いのだ。しかもそれ故に把握し難い」(註(16))と云える「神自身」(一)(13)へと向けて一歩踏み出したのである。

実にこの一歩は細やかな踏み出しに思える。蓋し正に慎ましい歩みの中にこそ、無量の重みが宿ると云えるのが宗教行為である。この歌、と言う祈り(レリギオー)が、思想詩冒頭の響きとともに始まる。読者は此所から、「ドイツの心が……始めて真正に芽生え、あたかも生育する自然の如く、静寂の中で、自らの密やかで遠大な諸力を展開させることだろう」(註(21))と期待する。考えてみるに、この期待は空しいものでなからう。なぜならヘルダーリンの「芸術は確かに安らぎ(ルーエ)を与える。だがこの芸術の安らぎは実体の無い空虚なものではなく、生ける静謐

(ティ・レベンディゲ・ルーエ)であり、この生ける静謐においては、あらゆる諸力が生き生きと働くけれども、しかし内奥において親密(イニヒ)に調和(ハルモニアー)している正にそれ故に、諸力が活動しているとは認められない」(註(22))からである。思想詩冒頭に誕生するのは、正にこの「生ける静謐(die lebendige Ruhe)」に他ならないと言えよう。内に生き生きとした古典古代への情熱(パトス)を秘めつつも赤裸に主情を吐露することなく、静かに悠然と詩歌象徴は都市像に兆す人倫(エートス)世界を目立たずに力強く流れてゆく。別論で私が探求した意味深長な「燈火の光(Erleuchtung)」が此所に「生成(wird)」す。

…… still wird die erleuchtete Gasse,
ひそやかに街路に燈火がともし、

恐らく翻訳不可能な「エアロイヒトゥング」の「生成」により、新たな世界観が当時の生きた市民社会の現実から誕生しようとしている。正に「生ける静謐」の象徴とも言える「エアロイヒトゥング」の「生成」により、思想詩冒頭の詩歌象徴は中間休止の頭韻(... Stadt; still...)の調べに深い親密性(ティーフエ・イニヒカイト)を獲た後に、この親密な基底から「生成する自然の如く、静寂の中で、自らの密やかで遠大な諸力を展開させ」(註(21))てゆくのである。

(三) 燈火と松明

……ひそやかに街路に燈火がともし、
して松明に飾られて騒然と馬車は疾駆し過ぎ去る。

(1) 生成と消滅

既に私は「パンとぶどう酒」冒頭の都市像⁽¹⁾と題する別論において、思想詩冒頭二句に関し次の見解を立て実証に努めた。すなわち詩人の他の作品と同様に、この思想詩も歌い始めからして既に決して「丸く収まった芸術作品」(ein abgerundetes Kunstwerk)⁽²⁾ではなく、実は数多くの二律背反なす相互矛盾を孕みつつ「調和ある対立」(das Harmonisch-entgegengesetzte)⁽⁴⁾を目標としているという観点から、私は第一句の「燈火」と第二句の「松明」との間に相違を見出し、この相互対立を「エーロイヒトウング」(Erleuchtung)と「ベロイヒトウング」(Beleuchtung)との明暗の下に探求した。

この光の対位法(Kontrapunkt)に呼応して、同時に場の対位法が、つまり第一句に云う狭い「街路(Gasse)」と、第二句の「(幾台もの)馬車が疾駆し過ぎ去る(rauschen die Wagen hinweg)」ことの出来た程の広い大路(Strasse)との対比が更に目に留まる。此所で「(華美な幾本もの)松明(の炎)に飾られて(mit Fackeln geschmückt)騒然と(幾台もの)馬車が疾駆し過ぎ去る」のは恐らく華麗な夜会(Abend-gesellschaft)ととりわけ歌劇(オペラ)劇場(Opernhaus)を指してであろう。すると自家用車で遊興へ赴く門閥とは好対称をなして、日

常の労働に精を出し「満ち足りて家路へと、昼間の欲びに別れを告げ、安らぎを求めて歩みゆく人々(Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen)」(第三句)が瞳目に値する。そして詩人は温かく見守る眼差で、この「家路へと歩みゆく人々」を歌い上げた後に、市民生活の熟慮と安らぎの場を充実し満ち足りた律動で仕上げる。「思慮深い家長は悠然と和やかにわが家にくつろぐ(ein sinniges Haupt / Wohlfrieden zu Haus)」。既に(二)(2)「内省する魂」に関する論述の終結部でも述べたように、正に此所の市民生活の力強い肯定において、既存封建秩序の下での諸価値が崩壊してゆく契機が、思想詩冒頭で慎ましくも謹厳に「街路」ともなる「燈火の光(Erleuchtung)」に既に「生成(Werden)」していると私には読み取れるのである。

かくして此で先の光と場の対位法に続いて「生成と消滅(Das Werden im Vergehen)」の相克が明確に見て取れる。すなわち「燈火の光」の「生成」(第一句)と好対称をなして、第二句では「松明」の輝きの「消滅(Vergehen)」が、「馬車が疾駆し過ぎ去る(rauschen die Wagen hinweg)」と云う歌声とともに感得されるのである。

祖国のこの没落、ないしは、この意味での変遷は、既存の世界の四肢において感取せられ、その様は、この既存のものが解体する瞬間と度合いに応じて正に、新しく勃興するもの、若々しいもの、可能なものが感取されるという具合なのである。

ヘルダーリン自身が自らの詩論「生成と消滅」(一七九九年)において、このように歴史の現実を掴んでいる点に留意するならば、これまで述べた見解を誤読とすることは困難であろうと私には思われる。

以上の読解を礎として、私は既に別論で「市民と門閥」の相克を「祝祭とオペラ文化」の対立として把え、「過ぎ去る(hinweg)」と歌われ

た「馬車」に飾られた「松明」の輝き (Beleuchtung) に、既成封建体制下の啓蒙オペラ文化の象徴を、更にこれと対比させて、「静かに安らう都市」に慎ましくも謹厳にともる「燈火の光 (Erleuchtung)」の「生成」に、新たに勃興する市民意識の萌芽を読み取り、正に新たな生育するこの市民意識に深沈し内省する魂にこそ、「至福なるギリシア」の古典悲劇誕生なす祝祭空間への開けを見出したのである。つまり野外で碧空のもと諸人に開かれた古典祝祭と好対称をなして、既成オペラ文化が屋内に閉じた特権空間に過ぎない点が考えあわされるからである。

(2) 燈火と月影

本論では以下、先の別論 (三) (1) (一) で未だ十分に論述できなかった諸点について考察を進めてゆきたい。まず留意されるのは、思想詩冒頭における「燈火の光 (Erleuchtung)」に見い出される黄昏の情緒である。まず此所での響きに静聴してみよう。

…… still wird die erleuchtete Gasse,
ひそやかに街路に燈火がともり

別論でも既に指摘した点であるが、この「燈火がともる街路」を《die beleuchtete Gasse》と表現するのと、原典のように《die erleuchtete Gasse》と歌うのとでは相当異なる点がまず留意されよう。言葉としては形容詞の語幹がともに、「燈火 (Leuchte)」を示しほとんど相違ない、と一見思われるが、しかしながら接頭語である《be-》と《er-》との違いに万感ともども到る万巻の重みが懸かっていると私には思われるのである。

一応既に別論では、主に両者の語義上の相違について、例えば両語に

関するグリム『ドイツ語辞典』の用例を検討しながら、「この用例では、《erleuchten》のつつましやかな燈火の光に比べて、《beleuchtungen》の光輝が目立っている」ことを確かめた、この点を更に此所で立ち入って考えてみるに、ザンダース『ドイツ語中型辞典 (Handwörterbuch)』(第八版、一九一一年)における次の語釈が興味深い例として注目され得ると思われる。

beleuchten 光を対象へと落せしめる、或いは落とす、投げる。
erleuchten 何かそれ自体暗いものを光で充たす。

右記の説明を比べてみると、《beleuchten》の方は、「対象 (Objekt)」が光により照らし出される印象を受けるのに対し、《erleuchten》には「何かそれ自体暗いもの (etwas an und für sich Dunkles)」において光がみちる、という語感がある。

思想詩第一句後半「ひそやかに街路に燈火がともり (still wird die erleuchtete Gasse)」を読む場合に、「街路」と云う「対象」が「燈火」により照らし出されると想像するよりも、むしろ昔日の「それ自体暗い」「街路に燈火」の光がみちる、と理解する方が自然であろう。ところが第二句に登場する「(幾台もの) 馬車 (Wagen)」はどうかと言うと、この場合にこそ正に「(幾台もの) 松明で飾られ (mit Fackeln geschmückt)」て、その華美な光に照らし出される姿が自ずと想い浮かぶと考えられるのである。故に第一句の「燈火」の光 (Erleuchtung) と、第二句の「松明」の輝き (Beleuchtung) が、くっきりとした明暗を形造ると読め得ると思われる。

ところで第一句で「街路」にともる「燈火」とは、別論で指摘したように、恐らく「窓辺の光 (lumières aux fenêtres)」であり、「月夜」ゆえに、街路において光がみちる場合、「月」の光をも考え併せることが出

来よう。別論でこの脈絡は十分に考え抜けなかったのであるが、此所で追考すると、第二句での「松明」の華美な輝き (Beleuchtung) と明暗を織りなすのは、「悠然と和やかにくつろぐ (Wohlfrieden)」[わが家 (zu Haus)] (第五句) の「窓辺の光」が象徴する心の本性 (natura) なす燈火の光とともに、天地自然 (natura) の「夜」をみたとす「月」の光でもあると考えることが出来る。すると「パンとぶどう酒」第一句の《Erlauchung》においても、丁度ベートルヴェンの名曲「月光 (Mondschein)」(一八〇二年) の場合と同様に、心の内面の深い所と悠久なる大宇宙とに反響し合う新たな世界観が、言わば「女は全てこうしたものさ」と云う類の世俗に閉じた啓蒙オペラ文化の華麗なる出でたちに立ち開かることになるのである。

成程受け取り方によっては、思想詩に云う「燈火の光」も「月光」と同様に、当時の浪漫風鬱屈気をこめて英訳のように「淡い油燈の光 (pale lamplight)」(ハンバーク訳) として、古き昔日を偲ぶ甘美な縁ともなるが、だが回顧の情に閉じるに留まらぬものがヘルダーリンやベートルヴェンの芸術表現に宿っているのを見落とすことはできまい。

五五 至福なるギリシア！ ……

荘嚴なる祝祭の広間！ 敷床は大海原！ そして食卓は山岳なす、
……
……あの偉大なる運命が轟き、
……あの神速の運命が砕け、普通の幸に満ちて、
雷鳴とともに清澄なる大氣から、眼界を過り運命が突入して来る。

六五 父なる神氣アイテールよ！ ……

父よ！ 清澄なる者よ！ …… (8)
……
……「パンとぶどう酒」第四句、第五五句―第六九句

あたかも悲壮で雄渾な「英雄交響曲」(一八〇四年) を想わせる「畏怖と荘嚴なる形式 (die schrecklichfeierlichen Formen)」が讃歌燃焼する悲劇祝祭の時空へと「パンとぶどう酒」の詩想は徐々に展開してゆく。実は思想詩冒頭にともる「燈火の光 (Erlauchung)」こそ、この祝祭空間での「清澄なる大氣」へと繋がる目立たぬ一条の光明に他ならないと考えられるのである。

考えてみるに、思想詩冒頭で「街路」に映える光明 (Erlauchung) を、単に「燈火の光」とは訳し得ないことが以上の考察から解かると思われる。がしかし力量不足で「ひそやかに街路に燈火がともし」としか訳できない点も了解され得るであろう。訳出できない大自然の月影は註解でこのように補なうべきとしたい。更に考量するに、今までは「パンとぶどう酒」冒頭の詩歌象徴の調べに静聴し、その響きに留意して《Erlauchung》に関して纏めてきた。その結果として、夜会へと至る華美な「松明」の炎に照らし出される第二句の《Beleuchtung》と好対称な第一句の《Erlauchung》が、「窓辺の光」と「月影」として、一方は「悠然と和やかにわが家にくつろぐ」市民生活の心の燈火を意味し、他方はこの人間をみたとす光明として了解された。此所に《Erlauchung》の両義性が見て取れる。すなわち、この光明は真に明かるいとも、実に暗い薄明とも言い得るのである。

少くとも第一句の光明は、第二句の「松明」のように目立つものではない。蓋し何気なく何処でと言う程のことでも無いけれども、第一句には光がみちており、「何かそれ自体暗いもの」(註(3)) が、白昼には気付かぬ新たな生き生きとした明暗の下に浮き彫りにされていると読める。これもまた《Erlauchung》に内蔵された語気ゆえであろう。この語気を考えてみるに、「パンとぶどう酒」成立当時のドイツ語辞典(アーデルング編、再版一七九三年―一八〇一年) には次の対比が見い出せる。

明かるくする (Hell machen)⁽¹⁸⁾
非常に明かるくする (sehr hell machen)⁽¹⁹⁾

興味深いことに、この両語義の対比は、文字通りそのままカムペ編「ドイツ語辞典」第一巻（一八〇七年）に踏襲されている。¹²このように実は《Beleuchtung》よりも明かるとされる《Erleuchtung》が、思想詩冒頭の歌い振りからは「ひそやかに（still）」と然り気なく限定づけられることにより、その明るさが目立つことなく、秘蔵の荘厳に住まうことになると思われるのである。

「パンとぶどう酒」の詩想の内実を第三部「西欧の夜」の第七節に云う「乏しき時代の詩人（Dichter in dürftiger Zeit）」にまで辿るならば、「その基底にある素材である詩人の心情や世界」(二)(3) (20)において、恐らくこのように叫ばれているのではないかと推測され得よう。

O Gott! beschwichtige die Gedanken,
Erleuchte mein bedürftig Herz!

おお神よ！ 様々な想念を静め、
わが乏しき心に光明 (Erleuchtung) を！⁽¹⁴⁾

（ゲーテ『ファウスト』第一一八八句―第一一八九句）

深い谷間でこのように叫ぶ「沈深せし神父 (Pater profundus)」とは表現様式を異にして、「乏しき時代の詩人」は「疎遠な形式は疎遠であればある程、より生き生きと働きかけるに違いない」(「二」)(3)(20)という認識の下に、日常の在り来りたる表象の只中に目立つことなき「光明 (Erluchtung)」へとまず眼差を落とす。すなわち、かく慎ましくも謹厳な始まりにおいて、「近いのだ。しかもそれ故に把握し難い神自身 (Nah ist / Und schwer zu fassen der Gott)」へと静

かに近付くためである。

「神自身」へと静かに近付くと云うよりも、むしろ「ひそやかに」その光が、みちると語るべきであろう。実際「月影 (Mondschein)」の光が、みちる、思想詩冒頭において、このことは高い象徴性を帯びて歌い出されている。ところで、これが日光 (Sonnenlicht) とは趣を異にして、光輝 (Licht) ある昼よりも一層と濃淡細やかで幽玄靈妙な仮象 (Schein) である点に留意したい。

何よりも音楽（の調べと響き）を、

すなわち陰影 (Nuançe) を一層と求めよう、
色彩 (Couleur) ならぬ陰影こそを！ (16)

(ヴェルレーヌ「詩法」第一句。第十三句―第十四句)

白昼の「色彩」とは好対称なして「仮象」なす「月影」の「陰影」の下において、思想詩冒頭で歌われる「都市」の「街路」に光が、みちると想像されるのである。

しかも此所では、「何よりも音楽（の調べと響き）」（註（16））が黄昏に安らう都市像を彫り刻む。

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse

律動の旋律曲線は、中間休止(＝)後「ひそやかに(still)」において深い親密性(Tiefe Innigkeit)に沈んだ所から「生成(wird...)」し始める。そしてこの光明(Erleuchtung)の生成(Werden)において、ダクテュロス(強弱)の弱音(die er-)に続いて響く語幹部分「ロイヒ(-leuch-)」において第一句は最高潮を迎えると読めよう。つまり「ディ・エアロイヒテ(光がみちる)」の箇所が山をなすことに

なり、此所の響きとともに「窓辺の光」と「月影」とで「街路(ガッセ)」に光がみちるのである。

先に述べたように、この「月影(Mondschein)」が「仮象(Schein)」である点が興味深い。仮象とは実在ではない故に、押しつけがましくもないし他者を強要もしない。かく実体がなく空であることにより、「月影」の仮象は独自の色合を帯びることになる。すなわち色調は、幽玄靈妙に「隠れて働きかける(Verborgenwirkend)」という具合である。従って読者は折に思想詩冒頭に「燈火の光」しか見ないで読み進んでしまふ。ところが第一句で最高潮なして律動が盛り上がり「光がみちる(die erleuchtete)」ところでは、《Beleuchtung》の輝きをも凌ぐ「月影」の《Erleuchtung》が実は「隠れて働きかけ」て都市像を優しく包容しているのである。

ところで、この「隠れて働きかける」と云う点において、思想詩冒頭の《Erleuchtung》は「パンとぶどう酒」の焦眉の急たる神人キリスト像へと繋がる。すなわち、この「静かな靈威(ゲーニウス)」こそ「消え」つつ「現われ」ることにより、正に「隠れて働きかける」と言える神性と考えられるからである。

最後に静かな靈威(ein stiller Genius)が現われ(erschienen)、
神々し

一三〇 安らぎを与え、(至福なるギリシアの) 昼の終結を告げ、姿を消

し無明へと隠れ(schwand)つて、
印相として、かつて彼(er)が現存し、再び

来臨するかも知れぬ、幾何かの恵みを、天上の祝祭合唱(コロス)
が残した。

【パンとぶどう酒】第八節、第二二九句—第二三二句)

「昼の終結(des Tags Ende)」(第二三〇句)とは当然「黄昏(Dämmerung)」なす「夕暮(Abend)」と考えられ、この時にキリスト像が

「ドイツの歌声(Deutscher Gesang)」とともに心に宿ると言えよう。

Am Abend, da es kühl war,

夕暮の涼しい折に、失樂園(の想い)が明らかとなりしも、夕暮にこの喪失感をキリストが砕く。夕暮には鳩が再び来たり、橄欖の一葉を口にくわえて運んできた。ああ美しい時! ああ夕暮時!

(バックハ「マタイ受難曲」第七四番叙唱)

正にこのような黄昏の夕暮時に、思想詩「パンとぶどう酒」で「乏しき時代の詩人」(註(13))は心静かに反問する。

Oder er kam auch selbst
或いはもしかすると彼自身もまた来臨し

【パンとぶどう酒】第六節、第一〇七句)

此所での「彼(er)」は、既に前述(二)(13)した通り神人キリストを指すのであるが、但し文脈上これは右記(註(18))思想詩・第八節の「彼(er)」(第一三一句)の場合とともに、「天上の祝祭合唱」(第一三二句)とか「或る神」(第一〇五句)のような古典ギリシアの方面をも同時に指す。故にこれは両義性の只中において「陰影」(註(16))ある仮象(Schein)と言うはかはない。実際に文字通り右記(註(18))のキリスト像は「現われ(erschienen)」消え隠れた(schwand)」と歌われることにより、あくまでこの「現象(Erscheinen)」が仮象(Schein)へと繋がることを物語っているのである。これは正に思想詩冒頭の《Erleuchtung》と呼応する月影(Mondschein)のキリスト像と言えよう。

かくして「光がみちる(ディ・エアロイヒテテ)」(第一句)と歌い上げられた「月影」と「窓辺の光」が、「隠れて働きかける」(註(17))という本性上、「パンとぶどう酒」の焦眉の急キリスト像と心から響き

合うことが理解されたと思われる。蓋しこれはあくまで、稀有な詩歌家
徴の調べにおいて成就することであり、決して通り一遍の用語《Er-
leuchtung》の成せる業ではないと考えられる。例えば既に示した「ファ
ウスト」第一一八八九句（註（14））の「光明」に濃淡が欠けているよ
うに、通常この言葉に濃淡細やかな「陰影」（註（16））があるとは思
えないのである。更に別の用例をゲーテの「帳面（Tag- und Jahres-
hefte）」（一八二〇年度）に探してみよう。

そこで私には再び次のことを考えてみる機会が与えられた。すなわち人が或
る光明（Erleuchtung）に心打たれ啓蒙された（aufgeklärt）のだが、しか
し直ちに再び自分個人（Individuum）の暗闇（Finsternis）へと逆戻り
してしまい、今や覚つかない燈火の光（Laternen）で以てどうにかこ
うにか苦労して先へ進もうと努めている。と云う具合のことを私は考えてみ
たのである。

興味深いことに此所では、「光明（Erleuchtung）」と「啓蒙（Auf-
klärung）」とが同義となり、「個人の暗闇（Finsternis seines Indi-
viduums）」に幽かにともる「覚つかない燈火の光（ein schwaches Latern-
chen）」と好対称をなしている。考えてみるに、恐らくこの様な語感で、
十八世紀啓蒙時代には《Erleuchtung》が扱えられていたのではないか
と思われる。

この脈絡で留意されるのが、十八世紀啓蒙期に活躍したドイツの文
豪レッシングの用法である。例えば「今日のはるかに啓蒙された時代
（die jetzt weit erleuchtete Zeit）」とか「啓蒙された国民（eine
erleuchtete Nation）」⁽²⁵⁾と云う表現において、レッシングは明らかに
《Erleuchtung》を《Aufklärung》の意味で使っている。更に興味深
いことにレッシングは「照らし出す」（註（22））と云う《Beleuch-
tung》の意味をも《Erleuchtung》で表わす。

照らし出す（Erleuchtung）？ もしこの松明（Fackel）が只ひとりの対
象（Gegenstand）を照らし出しさえすれば！（erleuchtet）……⁽²⁶⁾

更に華麗な「劇場照明（Illuminations théâtrales）」をも、レッシン
グにあうては《theatralische Erleuchtungen》と云うことになる。蓋
しカムヘ編「ドイツ語辞典」第一巻（一八〇七年）のみならず、アイデ
リング編ドイツ語辞典の第一巻（初版一七七四年、再版一七九三年）⁽²⁹⁾に
も同じ文面で明記されているように、この「多くの明かりや油燈で照明
する光飾（イルミネーション）」は、あくまで「狭義で（In engerer Be-
deutung）」の《Erleuchten》の意味に過ぎないのである。

ならば《Erleuchtung》の本来の意味はと云うと、それは丁度「もの
のあはれ」が「源氏物語」などの歌心豊かな傑作により始めて意識せら
れ得るように、「祖国（ドイツ）の詩歌の崇高で純粹な歓呼（das hohe
und reine Frohloken vaterländischer Gesänge）」⁽³⁰⁾におうこそ、
意味深長な言葉《Erleuchtung》本来の意味が響き渡ると言えよう。こ
の点では、先に見たゲーテの「ファウスト」の用例（註（14））、すなわ
ち「わが乏しき心に光明（Erleuchtung）を！」と深い谷間で叫ぶ「沈
深せし神父」の呻吟は、成程「啓蒙」と対比なす「神秘の合唱（Chorus
mysticus）」⁽³¹⁾（「ファウスト」結句）を誘う表現なのであるが、本来どこ
か芝居じみている、側面を拭い取れないであらう。つまり未だ詩想が「高
みへと落ちこんで（in die Höhe fallen）」⁽³²⁾おり、「感情が全てなの
だ」（（11）（3）（18））と云う高揚感に閉じてしまっているのである。

「ペンとぶどう酒」冒頭の《Erleuchtung》には、「啓蒙」の晴やか
さも、「神秘」の物物しさもない。「静かに安らう都市（Rings um
ruhet die Stadt）」の何処とはなき「街路に、ひそやかに光がみちる
（still wird die erleuchtete Gasse）」と慎ましく歌われているのみ
である。蓋しかく歌われるとともに、謹厳な市民意識に呼応して「崇高

で純粹」に「月影」と「燈火」の「光がみちる(ディ・エフロイヒテテ)」と詩歌象徴が響きわたる。すると、先のゲーテの表現(註(23))によれば、単に「個人の暗闇」を点す「覚つかない燈火の光」に過ぎないとされた、内省する魂の歌声が徐々に目覚め、それに静聴する心に光がみちると言える。確かに「この生ける静謐においては、あらゆる諸力が生き生きと働くけれども、しかし内奥において親密(イニヒ)に調和している正にそれ故に、諸力が活動しているとは認められない」(二)(3)(22)。ところが恐らく、静かに聴きこえる「ドイツの心は、このような風土の下で、この新たな平安の恵みの下で、始めて真正に芽生え、あたかも生育する自然の如く、無言の中で、自ら密やかに遠大な諸力を展開させることだろう」と読者には予感され得るのである。

(3) 発酵と解体

諸国民は黙し微睡んでいた。だが炯眼な運命には、諸国民が眠り込んだとは見えず。そして到来したのは、あの冷徹で怖ろしい自然の息子、あの太古よりの不穏なる精神(Geist der Urnuth)であった。【諸国民は黙し……】第一節、第一句―第四句)

『パンとぶどう酒』を読み解く上で、本論は第一句と第二句とに、《Beleuchtung》と《Beleuchtung》との明暗を「調和ある対立」(三)(1)(4)として見出す。ところで、ヘルダーリン詩歌を理解する上で鍵となる言葉と思われる、この「調和ある対立」を具体化する詩歌象徴において、もし「調和」の方へと重心が傾き気味となると、例えば次のような歌いぶりとなろう。

おのが小屋の門への木蔭に やすらかに農夫は憩い

足るを知るその人のかまどの煙は立つ。
やさしく旅人を迎えて平和な
村には夕べの鐘がひびく。

【夕べに思う】第一節全四句)

このように優しく包み込む夕暮の情緒は、先に見たクラウディウスの『夕べの(祈りの)歌』(二)(2)(6)にも見受けられるように、何処か「丸く収まった芸術作品」(三)(1)(3)の感を免かれ難いであろう。これらに対して『パンとぶどう酒』冒頭の歌い出しは、何処となく割り切れない響きを持って始まる。例えば前述の「宥和の旋律(Rings um ruhet die Stadt)」(三)に關しては、平声による「全き静けさ」(二)(3)(11)と異なり、静かではあるが同時に動いている動静が確認されたと思われるじ、また「燈火と月影」(三)(2)についての今までの考察においては、内省する魂が深い所で悠久なる宇宙空間と反響し合うこととか、或いは「隠れて働きかける」(三)(17)と言える有無の両義性の只中にある陰影ある仮象としての「月影」の「光がみちる(ディ・エフロイヒテテ)」と歌われる調べが了解されたと考えられる。いずれにおいても『パンとぶどう酒』の詩歌象徴が、十八世紀ヴィーン古典派の和声音楽のように「丸く収まった芸術作品」と云うよりは、その既成の殻を破り新たな十九世紀音楽へと道を開いたベートーヴェンの芸術表現と軌を一にすると見る方が妥当であろうと思われるのである。

もし或る一つの原理なり色調が全体を包みこんでしまえば、「調和」はあるかも知れないが「対立」は解消されることになる。この言わば封建的専制国家に似た「丸く収まった芸術作品」に対し、新たに勃興する市民意識は共和制議會民主主義に似た「対立」を何処までも孕む「調和」を芸術表現にも求める。例えばシラーが『ドン・カルロス』(一七八七年)第三幕・第十場で、旧教カトリック一色の専制スペイン絶対主義国

家の安寧を、「墓地の安らぎ(Die Ruhe eines Kirchhofs) -」と
言い中てたように、封建的専制が誇る「何ら陰影なき平和における臣民
の幸福(des Bürgers Glück in nie bewölktm Frieden)」では、
啓蒙と革命の時代を担う新たな市民意識を満足させることは出来ないと言
える。実際フランス大革命は一七八九年に勃発し、自由・平和・友愛
の旗印の下に「人權と市民権の宣言(Declaration des droits de l'homme
et du citoyen)」が採択され、更に共和制下による王ルイの斬首(一七
九三年)に具体例が見られる如く、「今や既に王の時代ではない(Dis
ist die Zeit der Könige nicht mehr)」(クルダーリン「エムベドク
レースの死」初稿、第一四四九句)と云う認識が萌えたのである。

本論で既に述べたように、「生ける静謐(die lebendige Ruhe)」
(二)(三)(22)を本質とする「パンとぶどう酒」冒頭は、「墓地の
安らぎ」(註(3))とは正反対の人間に「悠然と和やかにくつろぐ
(Wohlfrieden)」(第五句)と歌われる動静を宿している。蓋し此所
で市民生活が、先の「夕べに思う」(註(2))に描かれているように、
充ち足りて「足るを知る(genügsam)」(第二句)とは思われない。むし
ろ「収支得失を慮る思慮深い家長」(第四句)には、「遠く未来の彼方
まで思慮をはせる商人(der fernhinsinnende Kaufmann)」の姿が想い
浮かび、既成の枠の中に収まり切ることなき豪気が感じられる程であり、
この謹嚴な市民意識が封建制下十八世紀宮廷オペラ文化の波をも凌ぐ高
潮となり「至福なるギリシア」を目指すと思取れるのである。

「パンとぶどう酒」冒頭では、この新たな市民意識の「生成」と、既
成オペラ文化の「消滅」とが、一見目立たぬ然り気ない表現の中に巧み
に織り込まれ、ややもすると度きつく現われる新旧の相克が「調和ある
対立」へと高められていると思われる。ところが、若年のヘルダーリン
の詩歌では、未だ「調和」へと到ることなき「対立」の相が如実に表わ
れていたと見ることが出来る。

あゝ 悲慘を囲む壁 欺瞞のひそむ壁から
いつまでも離れていたい。——向うには巨大な邸宅の
きらきらした屋根と 時代がかった塔の尖が 輝いて見える、
そこでは ぶなの樹もかしわの樹も ただ まばらに立っている。

二五 谷間から

宮廷馬車の車輪と 駿馬の蹄の音が
にぶく響いている、——廷臣たちよ、いつまでも
いつまでも 自分の馬車の車輪の音に つつまれているがよい、
巨大な邸宅の道化の舞台で 深々とお辞儀をして
いつまでもそこにいるがよい。——だがあなた方 高貴な人々よ
気高い老人や成年の男たち 気高い少年たちよ さあ こちらへ来
て

三〇

小屋を建てよう——ゲルマンの真の男性精神の
そして友情の 小屋を、このさびしい荒野に。

(「荒野にて」一七八七年頃、第二三句—第三三句)

恐らく「パンとぶどう酒」第二句で歌われている「馬車」で、まず第一
に思い浮かぶのは、此所に云う「宮廷馬車の車輪の音(das höfische
Wagenrassel)」(第二六句)であろう。

この「馬車の車輪の音につつまれている」(第二八句)のが「宮廷」
に纏わる「廷臣たち(Höfinge)」(第二七句)であり、詩人はこれを
「道化(Narren)」(第二九句)と解する。そして、この「道化の舞台
(Narrenbühnen)」(第二九句)である宮廷を、詩人は第二三句と第二
九句で二度「巨大な邸宅(Riesenhäuser)」と呼んでおり、此所を
「悲慘」と「欺瞞のひそむ」(第二二句以下)と所と解している。かく当
時の権勢にひむることなき心魂には、啓蒙と革命の時代に養われた内面
の豊かさ、自らの精神力の未来の可能性に対する揺らぎない信頼が潜
んでいると思われる。但し若き詩人の心には、宮廷の華美を乗り切るだ
けの十分な余裕が未だ熟していないと見られ、なお奇立ち気味の焦りが

拭い去れていないようである。

しかしながら既に此所には、詩人が生涯をかけて歌い出さんとする「ゲルマンの真の男性精神 (Der ächte germanische Mannsinn)」(第三二句) が、ささやかな「わが家」の住居たる「小屋 (Hütten)」(第三二句と第三三句) に根をおろして、「始めて真正に芽生え、あたかも生育する自然の如く、無言の中で、自らの密やかで遠大な諸力を展開させる」(三三)(34) のを期待できる響きが幽かに見受けられる。更にこの響きを一層と実質あるものに成長させ得た「不穏なる精神」(註(1)) がカント哲学であらう。

私に誰かが聞くとしよう。私の眼前にある宮殿が美しい看做すかと。ならば、私はちなみにこう答えるだろう。ポカンと口をあけて見濁れるだけのこう云う類のものには私は愛着を抱かないと。或いは、パリで小料理屋が一番気に入ったと言うイロクオイ族の酋長のように答えるかも知れない。いやそれだけではない。人民が汗水垂らして働いた成果を、そのような無くて済むものに浪費する門閥の虚栄心を私は正にルソー流に罵倒することができ、ついにはやすやすと次のような確信を抱くことができる。仮に私が或る無人島に置かれ、もはや人と再会する希望を断たれたとして、よしんば私が望むだけで、今述べたような華美な宮殿を魔力により即座に出現させることができるとしても、私はそのような労をとることさえしないだろう。もし私に居心地よい小屋が一軒あるならば。

【判断力批判】一七九〇年

哲人カントの眼中には、「巨大な邸宅」など無に等しく、若き詩人のように「悲惨を囲む壁 欺瞞のひそむ壁から、いつまでも離れていたい」(註(7)、第二二句―第三三句) などと言う願望すらない。かく達観して宮廷オペラ文化には目もくれず、悠然と生育する新たな時代の胎動に静聴する時に始めて、次第に勃興しつつある市民意識に「ひそやかに光がみちる (still wird die erleuchtete)」(第一句) とともに、「宮廷馬車の車輪の音」を「過ぎ去る (hinweg)」と何気なく自然に歌い上

げることが出来たと思われるのである。

ところが、こう然り気なく歌い得るまでの道のりは長い。本論では以下一層と具体化して、「パンとぶどう酒」冒頭の調べの背後にある当時の現実を考量することにより、この長い道のりを少しは明かるくしてみたいと思う。只今「宮廷馬車」について触れたが、この「馬車」が黄昏に往き交う折は、相当に「ひどい騒音」だったようである。例えば当時の資料としては「パリ描写 (Tableau de Paris)」(一七八二年―八八年) において、メルシエが次のように語っている。

五時十五分には、もの凄くひどい騒音だ。すべての街路は馬車で一杯。馬車という馬車があらゆる方向に走り、さまざまな芝居めざして疾走し、あるいは散策におもむく。

これは大都会パリのことであるから、「街路」とは言っても、「極楽大路 (Champs-Élysées)」のような「広小路 (Boulevard)」ではないと言っただけのことであって、むしろこれは「大路」に近い。そして、これが文字通り「あらゆる方向に走り、さまざまな芝居めざして」「馬車が疾走し」ていたと想像される。

ところが、「パンとぶどう酒」冒頭の背景をなす領邦ヴェルテムベルクの首都シュトゥットガルトは、大國フランスの大都会パリほど多種多様な娯楽施設を持っているわけではなく、「さまざまな芝居めざして馬車があらゆる方向に疾走し」たのではないと考えられる。例えば「ドイツ史跡都市案内 (Handbuch der historischen Stätten Deutschlands)」第六巻には、一七九四年のシュトゥットガルト市街地図が掲載しており、これから「歌劇場 (Opernhaus)」は一箇所、今日の「宮城広場 (Schloßplatz)」の東側(国鉄中央駅方面)に見い出される。此所は今日では「芸術会館 (Kunstgebäude)」となっている。そしてこの歌劇(オペラ)劇場を向け、「松明に飾られて騒然と(幾台もの)馬車が

疾駆し過ぎ去る」(第二句)と想像するのが無難であろう。

この「オペラ劇場」は別名「歓楽の館 (Lusthaus)」と呼び慣わされ、文字通り「歓楽」の場であつたと考えられるが、しかしこの「歓楽」に誰でも与れ得るわけではなかつたと思われる。つまり此所は特権階級たる門閥の「歓楽の館」であり、何よりの社交の場であつたと想像されるのである。この類をヘルダーリンが「道化の舞台」(註(7))と呼び、カントが「無くとも済むもの」(註(8))と看做したことは既に見たが、当時の門閥にはこれこそ最高、文化施設と思われていたことは間違いないであらう。

一七〇八年、オペラについての考えを公刊したファイントは、オペラハウスのなかでライプツィヒのがもつとも貧弱で、ハンブルクのがもつとも広く、ブラウンシュヴァイクのがもつとも完備し、ハノーファーのがもつとも美しいと述べている。だが、もしファイントがこの世紀の半ば以降も生きながらえていたならば、おそらく何をおいてもヴェルテルムベルク公国のオペラを最高のものとしてあげていただであらう。……この施設はヨーロッパのなかで最良にして、かつもつとも豪華なものであるという折紙つきであつた。それというのも、公は舞踊家のヴェストリス、バレエの名手ノヴェールなどの一流のソリストを毎年パリからよびよせるばかりか、衣裳方もフランスの首都から調達したからである。……舞台装置も、ここでは理想どおりのものがしつらえられた。一七七二年の「フェント」の舞台では、ムーア人の王は三百人の騎兵をお供にしたがえていたし、一七七九年シュトゥットガルトで上演されたサッキニの「カリロエ」では、十六人の下士官、四百七十人の歩兵、三十人の軽騎兵が脇役として出演した。

このように「十八世紀のドイツ、啓蒙主義」(一九二二年)でベーンは詳細な当時の報告をしている。

詳細に此所で話題となつてゐる歌劇場(オペラハウス)は、ヴェルテルムベルクの首都シュトゥットガルトのものと、更にもう一つ離宮ルードウィヒスブルクのものとの両方である。もし一五一四年のデューピンゲ

ン契約 (Tübinger Vertrag) 以来の伝統ある領邦民会 (Landschaft) を中心にすれば、領邦首都は依然としてシュトゥットガルトなのであるが、但し宮廷 (Hof) を念頭に置くと、実は一七六四年から十年程一七七五年まで、つまりヘルダーリン誕生の一七七〇年前後、宮廷は離宮ルードウィヒスブルクに移つていた。これは言わば宮廷が民会と衝突した結果であるが、この理由は単に奢侈なる乱費のみではなくて、実は領邦の兵士を隣国フランスなどへ売り飛ばした暴政に起因している。つまり人民が売買可能な奴隷扱ひされたのである。

五

聞け 偉大なる高潔なシュヴァーベンの子らよ
きみたち いまなおいきいきとした自由の宝を身におび
富を誇る祖父の顔容にも
王侯の氣のままにも屈從せぬ者たちよ

一〇

高みから降つた種族よ わが祖國の華よ
ただ きみたちは驕慢のあやまちを警めるがよい
おお 兄弟よ これを思い起してわれらの努力の報酬としよう
ヘルマンのからだに圧制者の血はたぎっていなかったことを

〔謙抑〕一七八八年、第五句―第十二句

解放の英雄ヘルマンの血統として祖國シュヴァーベンの領邦ヴェルテルムベルク人民を讃えるヘルダーリンにとり、「圧制者 (Despoten)」(第十二句) たる「王侯の氣まま (Fürstenlaune)」(第八句) を碎き、「在來のものを全て恥じいらせる志操と思考法の來たるべき革命 (eine künftige Revolution) が来るのを私は信じる」と表明する場合、相当の現実上の裏付けがあつたと思われるのである。

まずこの「圧制者」たる「王侯」に的を絞り、「パンとぶどう酒」第二句で然り気なく「過ぎ去る (hinweg)」と歌われた既成特権社会の門閥の姿を把まえてみよう。例えば「功名心」(一七八八年)の第三節で

ヘルダーリンは「圧制者 (Despoten)」を「小暴君 (Kleinre Wütiche)」と説明して、宮廷に纏わる社会を次のように描く。

王の威容を真似ようとして 小暴君は
おのれの貧しい国を凌辱する
すると 安ものの勲章はしさに
顧問官らは施政の舵を手ばなす⁽¹⁵⁾

先の「十八世紀のドイツ」(註(11))の記述に「毎年パリからよびよせる」とか「フランスの首都から調達した」とあることから明白なように、此所に云う「王 (Könige)」の代表は大国フランスの王ルイに他ならないと言える。

王たる者は皆、反逆者 (Rebelle) であり篡奪者 (usurpateur) である。……ルイはフランス人民 (Peuple) と戦い、敗北した。この王ルイは野蛮人 (Barbar) であり、……私達フランス市民 (citoyens) を自らの奴隷 (esclaves) と看做していたのだ。

一七九〇年十一月十三日にフランス大革命下での国会で、議員サン・ジュストが主権在民なす市民社会の原理に基づいて、このように弾劾したルイの家系ブルボンの宮廷ヴェルサイユこそ、小邦分立なすドイツの領邦ヴェルテムベルクの「小暴君」が範とし尊重した啓蒙の華であったと考えられる。蓋し、「今や既に王の時代ではない」(註(5))と公言される市民革命の時代は目前に迫っていたのである。

革命とは当然、単に政治経済上に留まらない。もし文化の広範な領域における動きを考えに入れるならば、十八世紀ドイツ音楽こそ古典ドイツ哲学にも劣らぬ革命性に溢れていたと思われる。例えば「十八世紀のドイツ」(註(11))の叙述で礼讃されているような、「フランス」中心の歌劇(オペラ)音楽に關し当時の革命の声を聞いてみよう。

もし只この思わしいフランス語が、音楽にとりこんなにも卑劣 (hundstotisch) でなければ! これは何ともひどいものです! ドイツ語はやはりフランス語と違い神々しい。それにしかもまず歌い手ときたら男声も女声も(何たる様か)! こんな人々は歌手とは呼べないでしょう。なぜなら、歌うと言うより叫び吠えているのですから。しかも声を限りに、鼻から咽から。フランス人は全く(間抜けの) 驢馬 (haie Eseln) であり、そのままに留まり、何一つ出来ないのです。

(一七七八年七月九日付モーツァルトより父への書簡)

この新鋭の音楽家の書簡は実にパリから発せられている。仮に芸術家の誇張をさし引くとしても、根本からこの批評が見当はずれと言うことにはならないであろう。実際ドイツ語めきには考えられない『マタイ受難曲』(一)(3)のような、幽玄靈妙な音の調べがフランスの当時の音楽家の手で可能であったとは思われない。むしろ華美で豪華絢爛たる当時の衣裳に合う様式の歌劇や音楽が、大国フランスの首都パリの勢を支配していたことと想像される。そして豪勢で飾り気あるこの隣国の贅沢を、小邦ヴェルテムベルクの「小暴君」は進取しようと日夜努めていた模様である。

恐らく此所には、祖国ドイツの風土から純粹に葦高い文化を育成しようと言うよりは、むしろパリの流行に追いつき少しでも「王の威容を真似よう」とする、当時の門閥の趣向が見い出されよう。中身の充実よりも飾り立て仰々しくすることが、また自らの「知性を主体的に行使」(一)(22)して「批判」し「吟味」(一)(20)することなどせず外来文化とか権勢の威容に倣うことが尊ばれたようである。

フランス音楽は非常に厳しい異端糾問によって維持されているのでして、この国に来たあらゆる外国人の頭に先ず第一に教訓の形で注入されることは、パリのオペラ座ほど美しいものは世界中で何処にもないことにすべて

の外国人が同意しているものだといふことなのです。

(ルソー「新エロイズ」第二部、書簡二三)

更にルソーは冷静にフランス文化圏における音楽の吟味を続ける。

あらゆる才能が必ずしも同一の人間に与えられることはないのとして、概してフランス人はヨーロッパのあらゆる国民の中で音楽的能力の最も少ない国民らしく思われます。エドワード卿はイギリスにもその能力がほとんどないと思われませんが、その違いは、イギリス人はそのことを知っていて、それを大して気にしていないのに、フランス人はたとえ多くの正当な権利を抛棄しても、音楽以外の一切の事については非難を大目に見ても、自分たちは世界一流の音楽家ではないということだけは認めたくないという点にあるのです。

(「新エロイズ」第二部、書簡二三)

当時はドイツ諸領邦の門閥がフランス語を言わば国際語として尊重し、この言葉に纏わるブルボン宮廷オペラ文化を愛好していた時代である。故にパリ一偏頭も不思議ではない。

この脈絡で「マタイ受難曲」や「英雄交響曲」の出現は一つの革命と看做される。これらはカント哲学や思想詩「パンとぶどう酒」と同様に、当時の宮廷オペラ文化に慣れた耳には聞こえてこない新たな響きへと静聴する。蓋しこの響きこそが、十九世紀市民社会の意識により伝統となり今日の文化遺産として受け継がれてゆくのである。他方オペラ文化の方はモーツアルトの繊細な精神により贅肉を削がれ洗練されてゆくのであるが、本論が話題としているシュトゥットガルトやルードヴィヒスブルクの歌劇場の場合には、恐らくそのような細やかな趣向よりも、むしろ先の「十八世紀のドイツ」(註(11))に語られていたような、「三百人の騎兵」とか「十六人の下士官、四百七十人の歩兵、三十人の軽騎兵が脇役として出演した」と言われる大規模な催物が好まれていたのではないかと思われるのである。

この脈絡を語る当時の資料を次に紹介しよう。これはユスティヌス・ケルナー(一七八六年―一八六二年)が、「わが少年時代の絵物語」(一八四九年)の初めての方で、一八世紀後半のルードヴィヒスブルクを回想して述べている箇所である。

離宮と向き合った(フランス語で)「お気に入り(Favorite)」と呼ばれた小宮殿では、ヴェルサイユ宮廷に匹敵する出費をかけて、物凄い花火(Feuerwerke)が催された。……温室庭園全体は新鮮な木の葉で満ち、三十以上の水盤からは涼しい噴水が飛び散り、上を見ると華麗な星空を形作る十萬の油燈が、下方の美しい花壇を照らし出していた(Der leuchteten)。この素晴らしい温室庭園では、時に極めて大規模な催物(Die groÛartigsten Spiele)、演劇(ドラマ)や舞踊(バレエ)や演奏が、当時の一流の巨匠たちにより執り行なわれた。

此所で正に「照らし出す(Beleuchten)」と「パンとぶどう酒」冒頭に関連する表現が登場する。当時としては多額な出費なしには望むべくもなかった、温室の「ガラス張りの物凄い建物(ein ungeheures Gebäude von Glas)」に取り付けられ、闇夜にも「花壇を照らし出していた」十萬の油燈(100 000 Gaslampen)の輝き(Beleuchtung)に、当時の「小暴君」の奢侈が見られるとともに、大国フランスの「ヴェルサイユ宮廷に匹敵する出費をかけて」も気にせず「貧しい国を凌辱する」(註(15))と云われた「庄制者」に対する詩人の怒りも十分に理解され得るのである。

考えてみるに、「十萬の油燈」の輝き(Beleuchtung)と言えども、「パンとぶどう酒」冒頭で「ひそやかに光がみちる(ディ・エアロヒテテ)」と歌われた「窓辺の光」と「月影」の光明(Erleuchtung)の響きの前では色褪せるように思われる。確かに哲学者により「ポカンと口をあけて見蕩れるだけ」(註(8))と評されたように、門閥の宮殿や温室庭園に見られる華美には、心に深く入る内面の幽玄靈妙な時空も開けなければ、星辰の彼方へと広がる宇宙空間も縁遠いと言えよう。実

際この権勢の座たる宮殿とて、新たに樹立されたカント哲学の殿堂ほど堅固なものではなく、自由なものではないと想像されるのである。

カントは僕たちドイツ人のモーセであり、僕たちを王国エジプト風の弛緩から解き放ち、自由で孤独な思弁哲学の砂漠へと連れ出し、神聖な山岳から威力ある立法を下すのだ。

一七九九年一月一日に弟に宛てた書簡で、ヘルダーリンは自国の文化の進むべき方向をしかと見定めている。すなわち「自由で孤独」な内省する魂にこそ、ドイツ文化の将来があると詩人は見る。このことは実際ブラームスやニーチェなどの十九世紀ドイツ諸学芸の達人たちが次第に実質あるものにしてゆく。

偉大なる収穫の日が始まり、

暴君の座 (Tirannenthron) は朽ち、

一〇〇 暴君の奴隷 (Tirannenknechte) が微ると、

わが同胞は英雄の如く集い、

ドイツの血とドイツ人への思いが燃える。

(ヘルダーリン「自由への讃歌」一七九二年、第九八句—第一〇二句)

来たるべき「収穫の日」を待望しつつ、十八世紀当時一世紀に亘り一八二九年まで埋もれていた『受難曲』の調べを何処とはなく伝え、やがて誕生する『英雄交響曲』(一八〇四年)の新たな響きと協和しつつ批判哲学の「不穏なる精神 (Geist der Unruh)」(註(一))を宿し、ヘルダーリンの思想詩『パンとぶどう酒』(一八〇〇年—一〇一年)は深沈する内省の淵において、既成特権オペラ文化が「発酵と解体 (Gärung und Auflösung)」⁽²⁾なす諸相の下に「過ぎ去る (hinweg)」と心静かに歌い上げたのである。

註 解

(一) 序 論

(1) 一八四五年—一八六六年刊八巻本フィヒテ全集に拠る作品集、一九七一年、第七巻、三七九頁。

(2) シュッツ(一八五五年—一八七二年)『マタイ受難曲』(一八六五年—一八六六年)。

(3) バッハ(一六八五年—一七五〇年)『マタイ受難曲』(一七二九年)。ゲッティンゲン・バッハ研究所/ライプツィヒ・バッハ資料館共編

(4) 『新バッハ全集』第二冊、第五巻(一九七三年)所収原典版に依る『マタイ受難曲』、音楽の友社、一九七六年、B W V 第十七、叙唱、五一頁—五二頁。

(5) 一五三四年版『聖書』原典複刻写真版(東独レクラム文庫)一九八三年、第二巻所収『新約聖書』二〇頁左段。

(6) デンツィンガー編『信仰と道徳に関する定義・宣言文書原典資料集』第三六版、一九七六年、第一五〇—一五一条、三六四頁。

(7) 右記(註(6))『原典資料集』第一五〇—一五一条、三六五頁。

(8) 右記『原典資料集』第一六〇—一六一条、五四五頁。

(9) 前掲(註(5))一五三四年版『聖書』第一巻、七頁左。シュトゥットガルト版原典ヘブライ語聖書『創世記』ヴェルテムベルク聖書協会刊、一九六九年、一五頁。一七二五年版二巻本ウルガータ聖書、第一巻、九頁。

(10) 右記『原典資料集』第一八五四—一八五五、四二四頁。

(11) 高橋克己『ヘルダーリンの西欧ギリシア論——「至福なるギリシア」』(二)古典ギリシアとキリスト教西欧 (4)古典神話の畏怖と莊嚴(高知大学学術研究報告、第三十三巻、人文科学、一九八五年、五一頁—五八頁)参照。

- (12) 右記(註(11))『ヘルダーリンの西欧ギリシア論』(三) 神話の神
 御最深の親密性(右記研究報告、第三十五卷、人文科学所収)参照。
 (13) シュトゥットガルト版ヘルダーリン全集、一九四六年―一七七年、第
 二卷、九三頁。(三)(2)(21)。

- (14) 全集、第二卷、九三頁。
 (15) 全集、第二卷、九三頁。第四節、第五五句。
 (16) 全集、第二卷、九三頁。第六節、第九一句。
 (17) 歴史批判版作品書簡集、作品集第四、『救世主』第四卷、考証資料
 (第一歌―第五歌)一九八四年、四頁。

- (18) ヴァイマル版シラー全集、第二七卷、一九五八年、二六頁。一七
 九四年八月二十三日ゲーテ宛書簡。
 (19) 全集、第六卷、三〇四頁。一七九九年一月一日付弟宛書簡一七二。
 (三)(3)(20)。

- (20) カント作品集(アカデミー版に依る)、一九六八年、第四卷、九頁。
 (21) 作品集、第三卷、十一頁―十二頁。『純粹理性批判』第二版、一七
 八七年、序文。

これまで私達の認識は全て、様々な対象に依り樹立されねばな
 らないと考えられていた。……私達はこう考える。「諸対象が
 私達の認識に依り樹立されねばならない」と。……かくして是
 は正に(天動説を覆した)コペルニクスの中心思想の血脈を伝え
 ることになる。

- (22) 作品集、第八卷、三五頁。
 (23) 全集、トゥスクルム古典叢書、一九五七年、第二部、二五〇頁。
 (24) 作品集、第五卷、二四〇頁。『判断力批判』(六八)「美的判断力
 批判」―「美の分析」

美とは、概念に依らず、或る不可避必然の満足(Wohlfallen)
 の対象として認識されるものである。

- (25) 五卷本ハンザー版全集、一九六五年―七六年、第五卷、四〇九頁。
 (26) 全集、第二卷、二〇二頁。『ドイツの歌』第十七句。
 (27) 右記『ドイツの歌』第二〇句。二〇二頁。
 (28) ハムブルク版作品集、一九八二年、第一卷、三八四頁。『情熱の三
 部曲』―一八二七年。
 (29) 全集、第二卷、九四頁。
 (30) 全集、第二卷、九〇頁。

- (31) 全集、第二卷、九〇頁。
 (32) 全集、第六卷、三〇五頁。一七九九年一月一日付弟宛ヘルダーリン
 書簡一七二。(三)(3)(22)。

(二) 宥和の旋律

(1) 頭韻と詩脚

- (1) 全集、第二卷、九〇頁。
 (2) 全集、第二卷、九〇頁。
 (3) ハイデルベルク版『エッダ』一九六二年、一頁。
 (4) レクラム文庫版『ヴァンツベックの使者より』抄、一九七〇年、三
 頁。平凡社『世界名詩集大成』第六卷、一九六〇年、四三八頁、轡
 田収訳。(二)(2)(6)。
 (5) 作品集、第九卷、八〇頁。
 (6) 私は読点(・)を間と看做して詩脚(⌣)に数え入れ、第二句頭を
 ダクテュロス(―⌣⌣)として読み、トロカイオス(―⌣)とは考え
 ない。

(2) 内省する魂

- (1) 歴史批判版、第六卷、一九七六年、二〇五頁。
 (2) 歴史批判版、第六卷、二一一頁。
 (3) 歴史批判版、第六卷、二三四頁。
 (4) 『マタイ受難曲』(一)(4)三〇〇頁。
 (5) 全集、第六卷、三九五頁。一八〇〇年夏母宛書簡二〇八。
 (6) (一)(4)四三八頁、轡田収訳。
 (7) (一)(1)『ドイツ国民に告ぐ』第八講。
 (3) 生ける静謐
 (1) シュトゥットガルト版全集に依る『ヘルダーリン辞典』第一部「詩
 歌」一九八三年、五三五頁。
 (2) 右記『ヘルダーリン辞典』五三五頁。六九三頁―六九四頁。
 (3) アッシュェンドルフ古典叢書『イーリアス』一九二九年、五頁。
 (4) 『救世主』考証資料(二)(17)三頁。
 (5) ヴァイマル版全集、第一卷、一九四三年、四〇九頁。一七九九年

【詩神年鑑】刊。

- (6) 作品集、第一卷、一九九頁。
- (7) 【発音辞典】一九六二年、六四一頁。
- (8) 【独語辞典】一九六八年、二九五一段。
- (9) 【大独和辞典】一九五八年、一二〇〇頁。
- (10) 作品集、第一卷、一四二頁。(二)(3)(13)。
- (11) 作品集、第一卷、五五五頁。
- (12) プレヤード版全集、第一卷、一九五九年、一〇四七頁。「第五の散歩」。
- (13) アルテミス記念版、第三卷「ゲーテ対話録」その二、一九五〇年、七七〇頁。(二)(3)(10)。
- (14) 全集、第一卷、一〇四五頁—一〇四六頁。岩波文庫、今野一雄訳、一九六〇年、八五頁—八七頁。
- (15) 全集、第二卷、九二頁。(一)(15)。
- (16) 全集、第二卷、一六五頁。【バトモス】初稿。
- (17) 作品集、第一卷、一五七頁。和訳全集、潮出版社、一九七九年—八二年、第一卷、一一頁、今井寛訳。
- (18) 作品集、第三卷、一一〇頁。
- (19) 作品集、第三卷、一二三頁。
- (20) 全集、第四卷、一五一頁。
- (21) 全集、第六卷、四〇七頁。一八〇一年一月頃弟宛ヘルダーリン書簡二二。(三)(2)(34)。
- (22) 全集、第六卷、三〇五頁。一七九九年一月一日付弟宛ヘルダーリン書簡一七二。(一)(32)。
- (23) 【パンとぶどう酒】冒頭の都市像 (三) 市民 (2) Erleuchtung (高知大学術研究報告、第三十二卷、人文科学、一九八四年、四二頁—四九頁)。(三)(1)(一)。

(三) 燈火と松明

(1) 生成と消滅

- (1) 高知大学術研究報告、第三十二卷、人文科学、一九八四年、二二頁—七〇頁。(二)(3)(23)。

- (2) 例えば「生のなかば」に関して私は別論、西欧の夜——「乏しき時代」(一) 明鏡と水底——ヘルダーリン「生のなかば」論(高知大学術研究報告、第三十四卷、人文科学、一九八六年、九五頁—一四〇頁)において、この短詩理解の要となる詩歌象徴「明鏡(ハイリヒニユヒテルン)」を、在来の研究の説くような「黄金の中庭」においては見ず、むしろ「正法眼蔵」で道元が云う「忽遇明鏡來時如何——百雜碎」と「鏡也自隱」の真諦においても擱もつと努め、悲劇の誕生(「ニーチェ」の主旨を此所においても詩歌読解の礎とした。

- (3) 「丸く収まった芸術作品」はゲーテ文学を評して、ハイネが「ロマン派」(世紀記念版全集、第八卷、一九七二年、三五頁)で述べた言葉であるが、これと「パンとぶどう酒」との関連については、私の別論「ヘルダーリンの西欧ギリシア論」(一)(11)、「(一) シラーの問題提起 (3) 理想と人生(二二頁—二六頁) 参照。

- (4) ヘルダーリン「詩歌精神の方法論」(一七九九年)。全集、第四卷、二六〇頁。
- (5) 全集、第四卷、二八二頁。

(2) 燈火と月影

- (0) この反省の機因は、一九八五年五月二十五日(土曜)に高知大学人文学部で会催された日本十八世紀学会第七回大会において、筆者が「松明と燈火」と題する口頭発表を成した折に、司会を勤めていただいた南大路振一教授(大阪市立大学)による御批判と御指導に拠る。註みに先生は後述のアーデルングとカムベのドイツ語辞典にある当該の箇所をわざわざ複写して郵送でお送り下さり、私が話題の《Erleuchtung》について再考する機を与えて下さった。此所で学恩に対し深く感謝の意を表したい。

- (1) 【パンとぶどう酒】冒頭の都市像 (二)(3)(23) (三) 市民 (2) Erleuchtung 四六頁。
- (2) 【ドイツ語中型辞典】九二頁。
- (3) 【ドイツ語中型辞典】一八八頁。
- (4) 右記「冒頭の都市像」論(註(一))四三頁。
- (5) 【パンとぶどう酒】第一節、「月」(第十四句)「夜」(第十五句)「星辰(の輝き)」に満ちた「夜」(第十六句)。全集、第二卷、九〇頁。

- (6) モーツァルト『女は全てこうしたものさ』一七九〇年。
- (7) 独英対訳ヘルダーリン詩歌・断片集、一九八〇年、二四三頁。
- (8) 全集、第二巻、九一頁―九二頁。
- (9) ヘルダーリン『オイディプスへの註解』(一八〇四年)第三章。全集、第五巻、二〇二頁。
- (10) アーデルング再版、複刻一九七〇年、第一巻、八四二段。
- (11) 右記再版、第一巻、一九一七段。
- (12) カムペ第一巻、三修社複刻一九六九年、四四九頁(註(10)相当)。
- (13) 九八九頁(註(11)相当)。
- (14) 全集、第二巻、九四頁。第二二二句。
- (15) 作品集、第三巻、三五七頁。
- (16) 『パトモス』初稿冒頭。全集、第二巻、一六五頁。(二)(3)(16)。
- (17) 詩歌全集(ブレイヤード版)一九六二年、三三六頁―三七七頁。一八二二年作。
- (18) 『婚礼前のエミリア』第三〇句。全集、第一巻、二七八頁。
- (19) 全集、第二巻、九四頁。
- (20) 全集、第二巻、二〇二頁。(一)(26)。
- (21) 『マタイ受難曲』(一)(4)二五七頁―二五八頁。
- (22) 全集、第二巻、九三頁。(一)(13)。
- (23) 詳述は『西欧ギリシア論』(一)(12)。(三)神話の神(10)記念版(二)(3)(13)第十一巻、一九五〇年、九一四頁。語彙に關しては、この記念版に依る『ゲーテ引用句辞典』(一九六八年)一八二頁参照。
- (24) 一九三五年刊二十五部『作品集』一九七〇年複刊、第六巻(第七部)『学者の吟味』独訳への序、六九頁。註(27)までは、語彙索引(第二五巻)の一〇頁参照。
- (25) 作品集、第五巻(第五部)『ハムブルグ演劇論』十一(一七六七年六月五日)六五頁。
- (26) 作品集、第八巻(第一〇部)『エベッスの婦人』第四場、二九一頁。
- (27) 作品集、第十一巻(第十三部)三三四頁。
- (28) 『ドイツ語辞典』第一巻(註(12))九八九頁。
- (29) 再版(註(10))第一巻、一九一七段。
- (30) 一八〇三年十二月付ヴィルマンズ宛ヘルダーリン書簡二四三。全集、

- (31) 第六巻、四三六頁。
- (32) 作品集、第三巻、三六四頁。
- (33) ヘルダーリン『省察』。全集、第四巻、一三三頁。
- (34) ランゲン『ドイツ敬虔主義の語彙』(一九五四年)には『erleuchten』に關して、「人間の魂に神の恵みが働きかけるのを記すために宗教性を造形化するどのような場合でも使われる自明の暗喩(Metaphor)」と説明があり、「わが光(Licht)よ、われに光明を(erleuchte mich)」と云う、先の『ファウスト』の例(註(14))と同類の用法が四四頁に挙げてある。
- (35) 一八〇一年一月頃弟宛ヘルダーリン書簡二二二。全集、第六巻、四〇七頁。(二)(3)(21)。
- (36) 発酵と解体
- (1) ヘルダーリン全集、第一巻、二三八頁。
- (2) 全集、第一巻、三〇一頁。和訳全集、河出書房新社、一九六六年―六九年、第一巻、三三六頁、手塚富雄訳。
- (3) ヴァイマル版全集、第六巻、一九七三年、一九〇頁。同全集、第七巻、第一分冊、一九七四年、五一四頁。
- (4) 右記第六巻、一九九頁。第七巻、第一分冊、五一四頁。
- (5) 全集、第四巻、六二頁。
- (6) ヘルダーリン『多島海』第七二句。全集、第二巻、一〇五頁。
- (7) 全集、第一巻、二九頁―三〇頁。和訳全集、第一巻、三六頁―三七頁、今井寛訳。
- (8) 作品集、第五巻、二〇四頁―二〇五頁。
- (9) 本城靖久『十八世紀バリの明暗』新潮選書、一九八五年、一四二頁。
- (10) 第六巻「バーデン・ヴュルテムベルク」一九六五年、六五七頁。
- (11) 『ドイツ十八世紀の文化と社会』三修社、一九八四年、四三七頁、垣本知子訳。
- (12) 興味深いことに丁度この時期、少年シラーは父の大尉とともにルードヴィヒスブルクへと一七六六年に転居し、その後一七七三年にシュトゥットガルトのカール学院へと強制入学させられるまで、この離宮所在地に留まり、士官たる父に連れられて無料でルードヴィヒスブルク歌劇場の催物を見物している。
- (13) 全集、第一巻、四〇頁。和訳全集、第一巻、四八頁、高岡和夫訳。

(14) 全集、第六卷、二二九頁。一七九七年一月十日付エーベル宛ヘルダーリン書簡一三二。註(24) 参照。

(15) 全集、第一卷、三八頁。和訳全集、第一卷、四六頁、高岡和夫訳。

(16) 選集、ガリマール版イデー叢書、哲学一五九、一九六八年、八〇頁／八三頁。

(17) 古典ドイツ哲学に関しては、ハイネの名著『ドイツ宗教・哲学史考』(和訳『ドイツ古典哲学の本質』岩波文庫)に、その哲学革命の意義が的確で詩才ある筆致で論述してある。

(18) パウムガルトナー『モーツァルト』第五版、一九四五年、二二三頁に引用。興味深いことにフランスの当時の著名な音楽家ルソーも同じようにバリの音楽について批評している。『この音楽については何も申し上げません。あなたがよくご存じです。しかし、あなたにはとても想像になれそうもないものは、上演中に劇場をとどろかす物凄いい叫喚、長々しい咆哮です。見ていますと、女優たちはほとんど煙草を起こさんばかりになって、握り拳を胸に当て、頭をうしろにのけぞらし、顔を火と燃やし、血管を膨れ上らせ、胃の腑を波打たせながら、あの金切声を肝臓から荒々しく引張り出すのです。そのために眼と耳のどちらが一そう不愉快に苦しめられるのか分からないからです。彼女らの努力が見る者を苦しめる程度は、彼女らの歌が聴く者を苦しめるのと同じなのですが、最も不可解なことは、ほとんどこの叫喚だけが観客の喝采を買うことです。観客の拍手を聞きますと、まるで耳の遠い人が所々で幾つかの鋭い音を聴き取れるのが嬉しくてならず、役者たちにますますその音を烈しくせよと励まそうとしているように思われるからです。わたしとしては、オペラ座で女優の叫び声が喝采されるのは市で香具師の力技が喝采されるようなものなのだと思います。それから受ける感じは不愉快で痛ましく、叫び声の続いているあいだ観客は切ない思いをしますが、それが故障もなく終了するのを見ると非常に満足して、快くその喜びを表明するわけなのです。』(岩波文庫『新エロイズ』第二卷、安土正夫訳、一九六〇年、一六五頁。プレヤード版全集、第二卷、一九六四年、二八五頁)

(19) 右記(註(18)) 岩波文庫、第二卷、一六〇頁。右記全集、第二卷、二八一頁。

(20) 右記岩波文庫、第二卷、一六七頁。右記全集、第二卷、二八六頁。作品集、全六部二巻本一九一四年版に依る複製、一九七四年、第一

部、六頁一七頁。

(22) 全集、第六卷、三〇四頁。(一)(19)。

(23) 全集、第一卷、一四二頁、

(24) 全集、第六卷、二二九頁。一七九七年一月十日付エーベル宛ヘルダーリン書簡一三二。註(14) 参照。

(昭和六〇年・一九八五年九月二四日受理)
(昭和六一年・一九八六年二月二八日発行)

19) Rousseau „La nouvelle Héloïse“ II. 23. Brief: op. cit. Bd.2. S.285.

„L'Opéra de Paris passe à Paris pour le spectacle le plus pompeux, le plus voluptueux, le plus admirable qu'inventa jamais l'art humain. ... la musique française se maintient par une inquisition très sévère, et la première chose qu'on insinue par forme de leçon à tous les étrangers qui viennent dans ce pays, c'est que tous les étrangers conviennent qu'il n'y a rien de si beau dans le reste du monde que l'Opéra de Paris.“

20) „La nouvelle Héloïse“ II. XXIII: op. cit. Bd.2. S.286.

„Tous les talents ne sont pas donnés aux mêmes hommes, et en général le François paroît être de tous les peuples de l'Europe celui qui a le moins d'aptitude à la musique; Milord Edouard prétend que les Anglois en ont aussi peu; mais la différence est que ceux-ci le savent et ne s'en soucient guère, au lieu que les François renonceroient à mille justes droits, et passeroient condamnation sur toute autre chose, plutôt que de convenir qu'ils ne sont pas les premiers musiciens du monde.“

21) Kerner, Justinus „Das Bilderbuch aus meiner Knabenzeit“(1849): Werke.

Nachdruck der Ausgabe Berlin (Deutsches Verlagshaus Bong) 1914. 6 Teile in 2 Bänden. Hildesheim. Olms. 1974. Bd.1. 1.Teil. S.6-7.

„So fanden in der dem Schlosse gegenüber gelegenen Favorite die ungeheuersten Feuerwerke statt, mit einem Aufwande, der dem am Hofe von Versailles gleichsam. ein ungeheures Gebäude von Glas Der ganze Garten bildete ein frisches Blätterwerk. Mehr als 30 Bassins spritzten ihre kühlen Wasser, und 100 000 Glaslampen, die nach oben einen prachtvollen Sternenhimmel bildeten, beleuchteten nach unten die schönsten Blumenbeete. In diesem Zaubergarten nun wurden die großartigsten Spiele, dramatische Darstellungen und Ballette und Tonstücke von den größten Meistern damaliger Zeit ausgeführt.“

22) Hölderlin. Br.172 an den Bruder(1.1.1799): StA 6. 304(I. 19).

23) Hölderlin „Hymne an die Freiheit“(1792) V.97-104: StA 1: 142.

Dann am süßen heißerrungen Ziele,
Wenn der Erndte großer Tag beginnt,
Wenn verödet die Tirannenstühle,
Die Tirannenknechte Moder sind, 100
Wenn im Heldenbunde meiner Brüder
Deutsches Blut und deutsche Liebe glüht;
Dann, o Himmelstochter! sing'ich wieder,
Singe sterbend dir das letzte Lied.

24) Hölderlin. Br.132 an Ebel(10.1.1797): StA 6. 229-230

„Und was das Allgemeine betrifft, so hab'ich Einen Trost, daß nemlich jede Gährung und Auflösung entweder zur Vernichtung oder zu neuer Organisation nothwendig führen muß. Aber Vernichtung giebt's nicht, also muß die Jugend der Welt aus unserer Verwesung wieder kehren. Man kann wohl mit Gewißheit sagen, daß die Welt noch nie so bunt aussah, wie jetzt. Sie ist eine ungeheure Mannigfaltigkeit von Widersprüchen und Kontrasten. Altes und Neues! Dieser Charakter des bekannteren Theils des Menschengeschlechts ist gewiß ein Vorbote außerordentlicher Dinge. Ich glaube an eine künftige Revolution der Gesinnungen und Vorstellungen, die alles bisherige schaamroth machen wird. Und dazu kann Deutschland vielleicht sehr viel beitragen. Je stiller ein Staat aufwächst, um so herrlicher wird er, wenn er zur Reife kömmt. Deutschland ist still, bescheiden, es wird viel gedacht, viel gearbeitet, und große Bewegungen sind in den Herzen der Jugend, ohne daß sie in Phasen übergehen wie sonstwo. Viel Bildung, und noch unendlich mehr! bildsamer Stoff! – Gutmütigkeit und Fleiß, Kindheit des Herzens und Männlichkeit des Geistes sind die Elemente, woraus ein vortreffliches Volk sich bildet. Wo findet man das mehr, als unter den Deutschen? Freilich hat die infame Nachahmerei viel Unheil unter sie gebracht, aber je philosophischer sie werden, um so selbstständiger.“

1 Neues Schloß	7 Herrenhaus, 1820 abgebrochen	11 Legionskaserne (Schillers Kaserne)
2 Altes Schloß	8 Waisenhaus (Institut für Auslandsbeziehungen)	12 Rotebühlkaserne
3 Kanzleigebäude	9 Akademie (ehem. Hohe-Carls-Schule)	13 Hospitalkirche
4 Prinzenbau		14 Reitschule, jetzt Königsbau
5 Stiftskirche		15 Opernhaus
6 Rathaus	10 Leonhardskirche	

11)Boehn, Max: Deutschland im 18. Jahrhundert. Die Aufklärung. Berlin. Askanischer Verlag. 1922.

12)Schiller in Ludwigsburg(1766-1773)

13)Hölderlin „Die Demuth“ 2.Str-3.Str. V.5-12: StA 1. 40.

Hört, größere, edlere der Schwabensöhne!

5

In welchen noch das Kleinod Freiheit pocht,

Die ihr euch keines reichen Ahnherrn Miene,

Und keiner Fürstenlaune unterjocht.

Geschlecht von oben! Vaterlandeskronen!

Nur euch bewahre Gott vor Übermuth!

10

O! Brüder! der Gedanke soll uns lohnen,

In Hermann braußte kein Despotenblut.

14)Hölderlin. Br.132 an Ebel(10.1.1797): StA 6. 229.

„Ich glaube an eine künftige Revolution der Gesinnungen und Vorstellungsarten, die alles bisherige schaamroth machen wird.“

15)Hölderlin „Die Ehrsucht“ 3.Str. V.9-12: StA 1. 38.

Um wie Könige zu pralen, schänden

Kleinre Wütriche ihr armes Land;

10

Und um feile Ordensbänder wenden

Räthe sich das Ruder aus der Hand.

16)Saint-Just „Discours prononcé le 13 novembre 1790 concernant le jugement de Louis XVI“: Oeuvres choisies. Collection Idées. Paris. Gallimard. 1968.

„Tout roi est un rebelle et un usurpateur.“(S.80)

„Louis a combattu le peuple: il est vaincu. C'est un barbare,

il regardait les citoyens comme ses esclaves“(S.83)

17)Heine „Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland“

18)Paumgartner, Bernhard: Mozart. Zürich. Atlantis. 5.Aufl. 1945. S.223.

„Wenn nur die verfluchte französische Sprache nicht so hundsföttisch zur

Musique wäre! Das ist was Elendes! Die deutsche ist noch göttlich dage-

gen. Und dann erst die Sänger und Sängerinnen! Man sollte sie gar nicht

so nennen, denn sie singen nicht, sondern sie schreien, heulen — und

zwar aus vollem Halse, aus der Nase und Gurgel — Die Franzosen sind und

bleiben halt Eseln. Sie können nichts.“

Vgl. Rousseau „Julie ou la nouvelle Héloïse“ II.Partie. XXIII: OEuvres complètes(II(3)12). Bd.2. 1964. S.285.

„Je ne vous parlerai point de cette Musique; vous la connoissez. Mais ce dont vous ne sauriez avoir d'idée, ce sont les cris affreux, longs mugissements dont retentit le théâtre durant la représentation. On voit les Actrices presque en convulsion, arracher avec violence ces glapissements de leurs poudrons, les poings fermés contre la poitrine, la tête en arriere, le visage enflammé, les vaisseaux gonflés, l'estomac pantelant; on ne sait lequel est le plus desagréablement affecté de l'oeil ou de l'oreille; leurs efforts font autant souffrir ceux qui les regardent, que leurs chants ceux qui les écoutent, et ce qu'il y a de plus inconcevable est que ces hurlemens sont presque la seule chose qu'applaudissent les spectateurs. A leurs batemens de mains on les prendroit pour des sours charmés de saisir par-ci par-là quelques sons perçans, et qui veulent engager les Acteurs à les redoubler. Pour moi, je suis persuadé qu'on applaudit les cris d'une Actrice à l'Opéra comme les tours de force d'un bâteleur à la foire: la sensation en est déplaisante et pénible; on souffre tandis qu'ils durent, mais on est si aise de les voir finir sans accident qu'on en marque volontiers sa joye.“

6)Hölderlin „Der Archipelagus" V.72-75: StA 2. 105.

Siehe! da löste sein Schiff der fernhinsinnende Kaufmann,
Froh, denn es wehet' auch ihm die beflügelnde Luft und die Götter
Liebten so, wie den Dichter, auch ihn, dieweil er die guten
Gaaben der Erd' ausglich und Fernes Nahem vereinte.

75

7)Hölderlin „Auf einer Haide geschrieben" V.22-33: StA 1. 29-30.

Wär' ich doch ewig fern von diesen Mauren des Elends,
Diesen Mauren des Trugs! – Es blinken der Riesenpalläste
Schimmernde Dächer herauf, und die Spizen der alternden Türme
Wo so einzeln stehn die Buchen und Eichen; Es tönet

25

Dampf vom Tale herauf das höfische Waagengerassel
Und der Huf der prangenden Rosse – – Höflinge! bleibet,
Bleibet immerhin in eurem Waagengerassel,
Bükt euch tief auf den Narrenbühnen der Riesenpalläste,
Bleibet immerhin! – Und ihr, ihr edlere, kommet!

30

Edle Greise und Männer, und edle Jünglinge, kommet!
Laßt uns Hütten baun – des ächten germanischen Mannsins
Und der Freundschaft Hütten auf meiner einsamen Haide.

8)Kant „Kritik der Urtheilskraft": Werke(I. 20) Bd.5. S.204-205.

„Wenn mich jemand fragt, ob ich den Palast, den ich vor mir sehe, schön
finde, so mag ich zwar sagen: ich liebe dergleichen Dinge nicht, die blos
für das Angaffen gemacht sind, oder, wie jener Irokesische Sachem, ihm
gefallte in Paris nichts besser als die Garküchen; ich kann noch überdem
auf die Eitelkeit der Großen auf gut Rousseauisch schmälen, welche den
Schweiß des Volks auf so entbehrliche Dinge verwenden; ich kann mich end-
lich gar leicht überzeugen, daß, wenn ich mich auf einem unbewohnten Ei-
lande ohne Hoffnung jemals wieder zu Menschen zu kommen befände, und ich
durch meinen bloßen Wunsch ein solches Prachtgebäude hinzaubern könnte,
ich mir auch nicht einmal diese Mühe darum geben würde, wenn ich schon
eine Hütte hätte, die mir bequem genug wäre."

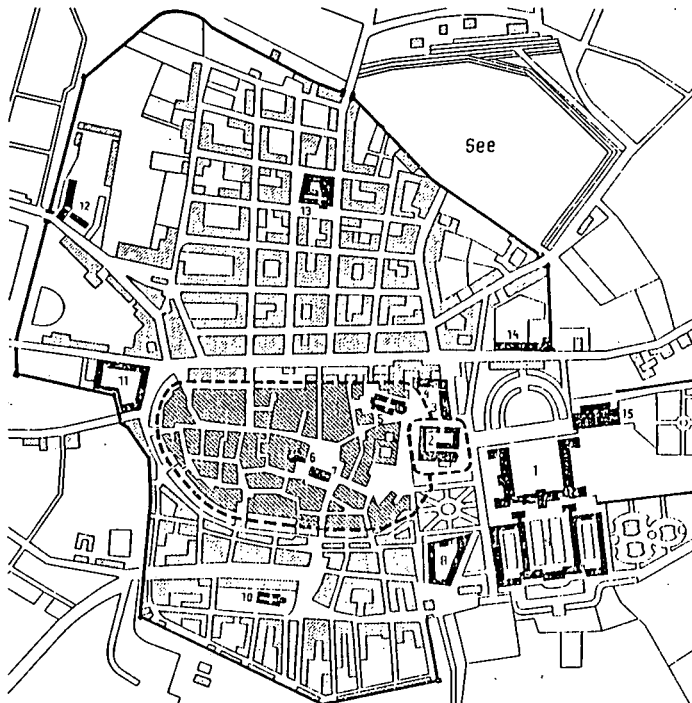
9)Mercier, Louis-Sébastien: Tableau de Paris. Amsterdam. 1782-88. Neu-
druck: Genève. Slatkine. 1979.

10)Handbuch der historischen Stätten Deutschlands. Bd.6: Baden-Württemberg.
Stuttgart. Kröner. 1965. S.657.

Stuttgart

■ 1287

■ 1794



- "Mit den allzugroben aber, welche so beschaffen sind, daß sie bei der jetzt weit erleuchteten Zeit gleich in die Augen fallen und daher der Kürze wegen hier übergangen werden, wird man Mitleiden haben."
- 25) Lessing: Werke. Bd.5(5.Teil). S.65: "Hamburgische Dramaturgie" 11.Stück. 5.6.1767.
- "daß man an Gespenster nicht mehr glaube und daß die Erscheinung der Toten, in den Augen einer erleuchteten Nation, nicht anders als kindisch sein könne."
- 26) Lessing: Werke. Bd.8(10.Teil). S.291: "Die Matrone von Ephesus" 4.Auftritt.
- "Erleuchtung? Wenn diese Fackel nur einen Gegenstand erleuchtet!"
- 27) Lessing: Werke. Bd.11(13.Teil). S.324: "Des Abts Dubos Ausschweifung von den theatralischen Vorstellungen der Alten"
- "Das Tageslicht, wie ich bald sagen werde, welches die alte Bühne erleuchten mußte, konnte sie nicht so helle machen, als es unsre theatralische Erleuchtungen tun können." Vgl. Wortregister(Bd.25). S.110: 24)-27).
- 28) Campe(III(2)12) Bd.1. S.989.
- "In engerer Bedeutung, mit vielen Lichtern oder Lampen hell machen (illuminieren)."
- 29) Adelung(III(2)10) Bd.1. Sp.1917.
- "In engerer Bedeutung, mit vielen Lichtern oder Lampen helle machen, illuminieren."
- 30) Hölderlin. Br.243 an Wilms(Dez. 1803): StA 6. 436.
- "Übrigens sind Liebeslieder immer müder Flug, denn so weit sind wir noch immer, trotz der Verschiedenheit der Stoffe; ein anders ist das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge."
- 31) "Faust" 'CHORUS MYSTICUS'(V.12104-12111): HA 3. 364.
- 32) Hölderlin "Reflexion": StA 4.233.
- "Man kann auch in die Höhe fallen, so wie in die Tiefe. Das letztere verhindert der elastische Geist, das erstere die Schwerkraft, die in nüchternem Besinnen liegt."
- 33) Langen, August: Der Wortschatz des deutschen Pietismus. Tübingen. Niemeyer. 1954. 1968(2.Aufl.) S.44.
- "erleuchten Eine der selbstverständlichsten Metaphern aller religiösen Bildlichkeit zur Bezeichnung der Gnadenwirkung Gottes auf die Seele. ... Mein Licht! erleuchte mich"
- 34) Hölderlin. Br.222 an den Bruder um Januar 1801: StA 6. 407(II(3)21).
- (3) "GÄHRUNG UND AUFLÖSUNG"
- 1) Hölderlin "Die Völker schwiegen, schlummerten ..." V.1-4: StA 1. 238.
- Die Völker schwiegen, schlummerten, da sahe
Das Schicksaal, daß sie nicht entschliefen und es kam
Der unerbittliche, der furchtbare
Sohn der Natur, der alte Geist der Unruh.
- 2) Hölderlin "Abendphantasie" 1.Str. V.1-4: StA 1. 301.
- Vor seiner Hütte ruhig im Schatten sitzt
Der Pflüger, dem Genügsamen raucht sein Heerd.
Gastfreundlich tönt dem Wanderer im
Friedlichen Dorfe die Abendglocke.
- 3) Schiller "Don Karlos"(Erstausgabe 1787) V.3802: NA Bd.6. 1973. S.190.
- Die Ruhe eines Kirchhofs - - - ... "
- Vgl. "Don Karlos"(Letzte Ausgabe 1805) V.3162: NA Bd.7. Teil 7. 1974. S.514.
- Die Ruhe eines Kirchhofs! ... "
- 4) "Don Karlos"(1787) V.3800-3801: NA 6. 189.
- des Bürgers Glück in nie bewölktem Frieden;
und diese Ruhe gönn' ich den Flamändern."
- Vgl. "Don Karlos"(1805) V.3160-3161: NA 7.(1). 514.
- Des Bürgers Glück in nie bewölktem Frieden;
Und diese Ruhe gönn' ich den Flamändern."
- 5) Hölderlin "Der Tod des Empedokles"(1.Fas.): StA 4. 62.
- EMPEDOKLES Diß ist die Zeit der Könige nicht mehr.

Himmlischen nicht ausgehet, in der allvergessenden Form der Untreue sich mittheilt, denn göttliche Untreue ist am besten zu behalten."

10) Adelung, Christoph: Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart. Leipzig. 1774-80(1.Aufl.). 1793-1801(2.Aufl.). Faksimile-Neudruck: Hildesheim. Olms. 1970. Bd.1. Sp.842.

"Beleuchten, verb. reg. act. I) Hell machen, erleuchten."

11) Adelung: op. cit. Sp.1917.

"Erleuchten, verb. reg. act. licht, d.i. sehr helle machen, mit hinlänglichem Lichte versehen."

12) Campe, Joachim: Wörterbuch der Deutschen Sprache. Braunschweig 1807-13. Faksimile-Neudruck. Hildesheim. Olms/Sansyusya. 1969-70. Bd.1.

"Beleuchten, v. I) trs. überhaupt hell machen, erleuchten."(S.449)

"Erleuchten, v. trs. licht oder sehr helle machen."(S.989)

13) „Brod und Wein“ 7.Str. V.119-122: StA 2. 94.

..... Indessen dünket mir öfters

Besser zu schlafen, wie so ohne Genossen zu seyn, 120

So zu harren und was zu thun indeß und zu sagen,

Weiß ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?

14) „Faust“ ‚Bergschluchten‘ V.11866-67/V.11888-89.

PATER PROFUNDUS, tiefe Region.

Wie Felsenabgrund mir zu Füßen

Auf tiefem Abgrund lastend ruht,

.....

O Gott! beschwichtige die Gedanken,

Erleuchte mein bedürftig Herz!

15) „Patmos“ 1.Fas. 1.Str. V.1-2: StA 2.165(II(3)16).

16) Verlaine „Art poétique“ V.1/V.13-14: Oeuvres poétiques complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Paris. Gallimard. 1962. S.326-327.

De la musique avant toute chose,

.....

Car nous voulons la Nuance encor,

Pas la Couleur, rien que la nuance!

17) Hölderlin „Emilie vor ihrem Brauttag“ V.29-31: StA 1. 278.

Der, wie ein stiller Gott auf dunkler Wolke,

Verborgénwirkend über seiner Welt 30

Mit freiem Auge ruht,

18) „Brod und Wein“ 8.Str. V.129-132: StA 2. 94.

Als erschienen zu lezt ein stiller Genius, himmlisch

Tröstend, welcher des Tags Ende verkündet' und schwand, 130

Ließ zum Zeichen, daß einst er da gewesen und wieder

Käme, der himmlische Chor einige Gaaben zurück,

19) Hölderlin „Deutscher Gesang“ V.17: StA 2. 202(I. 26).

20) Bach „Matthäus-Passion“(I. 4) Nr.74(BWV) Recitativo. S.257-258.

„Am Abend, da es kühle war, ward Adams Fallen offenbar; am Abend drückt ihn der Heiland nieder. Am Abend kam die Taube wieder und trug ein Ölblatt in dem Munde. O schöne Zeit! O Abendstunde!“

21) „Brod und Wein“ 6.Str. V.107: StA 2. 93(I. 13).

22) Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland“. [III] „Gott der Mythe“. (10) „Die tiefste Innigkeit“(I. 12).

23) Goethe: Gedenkausgabe(II(3)13). Bd.11. 1950. S.914: Tag- und Jahreshefte. 1820. Vgl. Lexikon der Goethe-Zitate. Artemis. 1968. Sp.182.

„Es gab mir zu abermaliger Betrachtung Anlaß, wie der Mensch, von einer Erleuchtung ergriffen und aufgeklärt, doch so schnell wieder in die Finsternis seines Individuums zurückfällt, wo er sich alsdann mit einem schwachen Laternen kummerlich forzuhelfen sucht.“

24) Lessing: Werke. Bongs Goldene Klassiker Bibliothek. 25 Teile. 1925/1929/1935. Reprografischer Nachdruck: Hildesheim. Olms. 25 Bände. 1970. Bd.6.(7. Teil). S.69: „Johann Huarts Prüfung der Köpfe zu den Wissenschaften. Aus dem Spanischen übersetzt von Gotthold Ephraim Lessing“(1752).

- „Goethe ... der Geist wurde Materie unter seinen Händen, und er gab ihm die schöne gefällige Form. So wurde er der größte Künstler in unserer Literatur, und alles was er schrieb wurde ein abgerundetes Kunstwerk.“
- 4)Hölderlin „Über die Verfahrungsweise des poetischen Geistes“: StA 4. 260.
„jene drei Eigenschaften mögen als Bestrebungen, das Harmonischentgegengesetzte in der lebendigen Einheit oder diese in jenem zu erkennen, im subjectiveren oder objectiveren Zustande sich äußern.“
- 5)Hölderlin „Das Werden im Vergehen“(1799): StA 4. 282.
„Dieser Untergang oder Übergang des Vaterlandes (in diesem Sinne) fühlt sich in den Gliedern der bestehenden Welt so, daß in eben dem Momente und Grade, worinn sich das Bestehende auflöst, auch das Neueintretende, Jugendliche, Mögliche sich fühlt.“
- (2)LAMPENLICHT UND MONDSCHEN
- 1)Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“(II(3)23). (III)Bürger. (2)Erleuchtung. S.46.
- 2)Sanders, Daniel: Handwörterbuch der deutschen Sprache. 8.Aufl. Hrsg: Wülfing, Ernst. Leipzig. Bibliographisches Institut. 1911. S.91.
„beleuchten, tr.: Licht (eig. und übertr.) auf das Objekt fallen lassen oder fallen machen, werfen.“
- 3)Sanders: op. cit. S.188.
„erleuchten, tr.: etwas an und für sich Dunkles mit Licht (eig. und übertr.) erfüllen, hell machen“
- 4)Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild ... "(III(2)1). S.43.
- 5)„Brod und Wein“ 1.Str. V.14-18: StA 2. 90.
Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond
Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt, 15
Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,
Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen
Über Gebirgeshöhen traurig und prächtig herauf.
- 6)Mozart „Così fan tutte“(1790)
- 7)Hölderlin: Poems & Fragments(Deutsch/Englisch). Hrsg. u. Übertr.: Hamburger, Michael. Cambridge University Press. 1980. S.243.
Round us the town is at rest; the street, in pale lamplight, grows quiet
And, their torches ablaze, coaches rush through and away.
- Vgl. Hölderlin: OEuvres. Bibliothèque de la Pléiade. Paris. Gallimard. 1967.
„Le-Pain et le vin“(Französisch: Roud, Gustave). S.808.
La ville autour de nous s'endort. La rue illuminée accueille le silence,
Et le bruit des voitures avec l'éclat des torches s'éloigne et meurt.
- 8)„Brod und Wein“ 4.Str. V.55(I. 15)/V.57-72: StA 2. 92.
Festlicher Saal! der Boden ist Meer! und Tische die Berge,
Wahrlich zu einzigem Brauche vor Alters gebaut!
Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,
Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang? 60
Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?
Delphi schlummert und wo tönet das große Geschik?
Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll
Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?
Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge 65
Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;
Ausgetheilet erfreut solch Gut und getauschet, mit Fremden,
Wirds ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt
Vater! heiter! und hallt, so weit es gehet, das uralte
Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab. 70
Denn so kehren die Himmlischen ein, tiefschütternd gelangt so
Aus den Schatten herab unter die Menschen ihr Tag.
- 9)Hölderlin „Anmerkungen zum Oedipus“ III: StA 5. 201-202.
„in den Auftritten die schrecklichfeierlichen Formen, das Drama wie eines Kezzergerichtes, als Sprache für eine Welt, wo unter Pest und Sinnesverwirrung und allgemein entzündetem Wahrsagergeist, in müßiger Zeit, der Gott und der Mensch, damit der Weltlauf keine Lücke hat und das Gedächtniß der

Dafür! Gefühl ist alles;
Name ist Schall und Rauch,
Umnebelnd Himmelsglut.

19) „Faust“ V.3910-3911: HA 3. 123.

„... die irren Lichter, / Die sich mehren, die sich blähen.“

20) Hölderlin „Grund zum Empedokles“ (1799): StA 4. 151.

„Die fremden Formen müssen um so lebendiger seyn, je fremder sie sind, und je weniger der sichtbare Stoff des Gedichts dem Stoffe der zum Grunde liegt, dem Gemüth und der Welt des Dichters gleicht, um so weniger darf sich der Geist, das Göttliche, wie es der Dichter in seiner Welt empfand, in dem künstlichen fremden Stoffe verläugnen.“

21) Hölderlin. Br.222 an den Bruder um Januar 1801: StA 6. 407.

„... und daß das deutsche Herz in solchem Klima, unter dem Seegen dieses neuen Friedens erst recht aufgehen, und geräuschlos, wie die wachsende Natur, seine geheimen weitreichenden Kräfte entfalten wird, daß mein' ich, daß seh' und glaub' ich, ...“

22) Hölderlin; Br.172 an den Bruder (1.1.1799): StA 6. 305. Vgl. [I]32.

„Man hat schon so viel gesagt über den Einfluß der schönen Künste auf die Bildung der Menschen, aber es kam immer heraus, als wär' es keinem Ernst damit, und das war natürlich, denn sie dachten nicht, was die Kunst, und besonders die Poësie, ihrer Natur nach, ist. Man hielt sich bloß an ihre anspruchlose Außenseite, die freilich von ihrem Wesen unzertrennlich ist, aber nichts weniger, als den ganzen Charakter derselben ausmacht; man nahm sie für Spiel, weil sie in der bescheidenen Gestalt des Spiels erscheint, und so konnte sich auch vernünftiger Weise keine andere Wirkung von ihr ergeben, als die des Spiels, nemlich Zerstreuung, beinahe das gerade Gegentheil von dem, was sie wirkt, wo sie in ihrer wahren Natur vorhanden ist. Denn alsdann sammelt sich der Mensch bei ihr, und sie giebt ihm Ruhe, nicht die leere, sondern die lebendige Ruhe, wo alle Kräfte regsam sind, und nur wegen ihrer innigen Harmonie nicht als thätig erkannt werden. Sie nähert die Menschen, und bringt sie zusammen, nicht wie das Spiel, wo sie nur dadurch vereinigt sind, daß jeder sich vergißt und die lebendige Eigentümlichkeit von keinem zum Vorschein kommt.“

23) Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (Forschungsberichte der Universität Kochi. Vol.32. Geisteswissenschaften. 1984. S.21-70). [III]Bürger. (2)Erleuchtung (S.42-49). Vgl. III(1)1.

[III]ERLEUCHTUNG UND BELEUCHTUNG

(1) „DAS WERDEN IM VERGEHEN“

1) Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (II(3)23). S.21-70. Vor allem [III]Bürger. (3)Der klassische Festspielraum und die ‚Kultur der Oper‘ des 18. Jahrhunderts (S.49-55). Vgl. II(2)23.

2) Takahashi, Katsumi: Hesperische Nacht — ‚Dürftige Zeit‘. [I], ‚Heilignüchtern‘ — Über Hölderlins „Hälfte des Lebens“ (Forschungsberichte der Universität Kochi. Vol.34. Geisteswissenschaften. 1986. S. -). Wie ‚das große Geschick‘ inmitten des ‚seeligen Griechenlandes‘ (I. 15) in „Brod und Wein“ als ‚der unmittelbare Gott, ganz Eines mit dem Menschen ... in der Gestalt des Todes, gegenwärtig ist‘, ‚Bricht jäh ein blick / Der unerahnten schrecks / Die sichre seele stört‘ im ‚heilignüchternen‘ Mittelpunkt ‚an dem Ausgang der grimmigen Einsicht‘ in „Hälfte des Lebens“ hervor, für den es keine ‚aurea mediocritas (=goldene Mitte)‘ gibt, die die bisherige Forschung im lyrischen Schlüsselwort ‚heilignüchtern‘ findet.

3) Heine „Die romantische Schule“ I. Buch: Säkularausgabe. Hrs: Nationale Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar/Centre National de la Recherche Scientifique in Paris. Berlin/Paris. Akademie/Editions du CNRS. Bd.8. 1972. S.35. In bezug auf Goethe. Vgl. Takahashi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin (I. 11). [I]Schillers Aufbruch. „Das Ideal und das Leben“ (S.22-26).

7) Der Große Duden. Bd.6: Aussprachewörterbuch. Mannheim. Bibliographisches Institut. 1962. S.641.

ringsum 'rɪŋs 'ʊm

8) Wahrig: Deutsches Wörterbuch. Gütersloh. Bertelsmann. 1968. Sp.2951.

rings 'ʊm

9) Großes Deutsch-Japanisches Wörterbuch. Hakuyusha. 1958. S.1200

rings-um [rɪŋs-ʊm, rɪŋs-ʊm]

10) HA 1. 142: II(3)13.

11) Wilkinson, Elizabeth: HA 1. 555.

„Über allen Gipfeln / Ist Ruh. In the long u of Ruh and in the ensuing pause we detect the perfect stillness that descends upon nature with the coming of twilight.“

12) Rousseau, Jean-Jacques „Les Rêveries du promeneur solitaire“ ,Cinquième promenade“: OEuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Paris. Gallimard. Bd.1. 1959. S.1047.

„Un silence absolu porte à la tristesse. Il offre une image de la mort.“

13) Goethe: Werke und Briefe. Gedenkausgabe. Zürich. Artemis. Bd.23. 1950. S.770: II(3)10.

Über allen Gipfeln

Ist Ruh,

In allen Wipfeln

Spürest du

Kaum einen Hauch;

Die Vögelein schweigen im Walde.

Warte nur, balde

Ruhest du auch.

D.7.September 1780

Goethe

Goethe überlas diese wenigen Verse, und Tränen flossen über seine Wangen. Ganz langsam zog er sein schneeweißes Taschentuch aus seinem dunkelbraunen Tuchrock, trocknete sich die Tränen und sprach in sanftem, wehmütigem Ton: Ja, warte nur, balde ruhest du auch! schwieg eine halbe Minute, sah nochmals durch das Fenster in den düstern Fichtenwald“

14) Rousseau „Cinquième promenade“: OEuvres complètes. Bd.1. S.1045-1046.

„Quand le soir approchoit je descendois des cimes de l'Isle et j'allois volontiers m'asseoir au bord du lac sur la grève dans quelque azyle caché; là le bruit des vagues et l'agitation de l'eau fixant mes sens ... Le flux et reflux de cette eau, son bruit continu mais renflé par intervalles frappant sans relache mon oreille et mes yeux suppléaient aux mouvemens internes ... l'uniformité du mouvement continu qui me berçoit, un état simple et permanent, qui n'a rien de vif en lui-même, mais dont la durée accroît le charme au point d'y trouver enfin la suprême félicité.“

15) „Brod und Wein“ 4.Str. V.55: [1]15.

16) Hölderlin „Patmos“ 1.Fas. 1.Str. V.1-2: StA 2. 165.

Nah ist

Und schwer zu fassen der Gott.

17) Goethe „Römische Elegien“ I. V.1-8: HA 1. 157.

Saget, Steine, mir an, o sprecht, ihr hohen Paläste!

Straßen, redet ein Wort! Genius, regst du dich nicht?

Ja, es ist alles beseelt in deinen heiligen Mauern,

Ewige Roma; nur mir schweiget noch alles so still.

O wer flüstert mir zu, an welchem Fenster erblick' ich

Einst das holde Geschöpf, das mich versengend erquickt?

Ahn' ich die Wege noch nicht, durch die ich immer und immer,

Zu ihr und von ihr zu gehn, opfre die köstliche Zeit?

18) Goethe „Faust“ V.3452-3458: HA 3. 110.

Und wenn du ganz in dem Gefühle selig bist,

Nenn es dann, wie du willst,

Nenn's Glück! Herz! Liebe! Gott!

Ich habe keinen Namen

23)Horatius „De arte poetica" 333: Sämtliche Werke(Latein/Deutsch). Tusculum-Bücherei. München. Heimeran. 1957. Teil II. S.250(Deutsch:S.251).

aut prodesse volunt aut delectare poetae
(Sinnbelehrend will Dichtung wirken oder herzerfreuend)

24)Kant „Kritik der Urteilkraft"(1790) 68: Werke. Bd.5. S.240.

„Schön ist, was ohne Begriff als Gegenstand eines nothwendigen Wohlgefallens erkannt wird."(„Kritik der ästhetischen Urteilkraft")

25)Schiller. Brief an Körner(23.2.1793): Sämtliche Werke in 5 Bänden. München. Hanser. 1965-76. Bd.5. S.409.

„Freiheit in der Erscheinung ist eins mit der Schönheit
Frei sein und durch sich selbst bestimmt sein, von innen heraus bestimmt sein, ist eins."

26)Hölderlin „Deutscher Gesang" V.1-4 / V.15-20: StA 2. 202.

Wenn der Morgen trunken begeisternd heraufgeht
Und der Vogel sein Lied beginnt,
Und Strahlen der Strom wirft, und rascher hinab
Die rauhe Bahn geht über den Fels,

.....

dann sitzt im tiefen Schatten, 15
Wenn über dem Haupt die Ulme säuselt,
Am kühlathmenden Bache der deutsche Dichter
Und singt, wenn er des heiligen nüchternen Wassers
Genug getrunken, fernhin lauschend in die Stille,
Den Seelengesang. 20

27)„Deutscher Gesang"(op. cit.)

28)Goethe „Triologie der Leidenschaft" „Elegie" V.79-83: Werke. Hamburger Ausgabe(=HA). München. Beck/dtv. 1982. Bd.1. S.384.

In unsers Busens Reine wogt ein Streben,
Sich einem Höhern, Reinern, Unbekannten 80
Aus Dankbarkeit freiwillig hinzugeben,
Enträtselnd sich den ewig Ungenannten;
Wir heißen's: fromm sein!

29)„Brod und Wein" 8.Str. V.136: StA 2. 94.

... aber es lebt stille noch einiger Dank.

30)„Brod und Wein" 1.Str. V.1: II(1)1.

31)„Brod und Wein" 1.Str. V.1: II(1)1.

32)Hölderlin. Br.172 an den Bruder(1.1.1799): StA 6. 305: II(3)22.

[II]„RINGS UM RUHET DIE STADT"

(1)STABREIM UND VERSFUSS

1)„Brod und Wein" 1.Str. V.1-2: StA 2. 90.

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.

2)„Brod und Wein" 1.Str. V.3-6: StA 2. 90.

Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen, 5
Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.

3)„Edda" „Vplopá" 4. 7-8: Heidelberger Ausgabe, hrsg Neckel/Kuhn. Carl Winter. 1962. S.13.

pá var grund gróin groenom lauki.

4)Claudius „Wandsbecker Bote" „Abendlied"(1779) V.4-6: II(2)6.

5)Goethe „Dichtung und Wahrheit" 1.Teil. 2.Buch: HA 9. 80.

„mein Vater hielt den Reim für poetische Werke unerläßlich. Canitz, Hagedorn, Drollinger, Gellert, Creuz, Haller standen in schönen Franzbänden in einer Reihe. Eine verdrießliche Epoche im Gegenteil öffnete sich für meinen Vater, als durch Klopstocks „Messias" Verse, die ihm keine Verse schienen, ein Gegenstand der öffentlichen Bewunderung wurden."

- 11)Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland“. [II]Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum. (4)„Die schrecklichfeierlichen Formen“(Forschungsberichte der Universität Kochi. Vol.33. Geisteswissenschaften. 1985. S.51-58).
- 12)Takahashi: op. cit. [III]„Gott der Mythe“. (10)„Die tiefste Innigkeit“(Forschungsberichte cit. Vol.35. Geisteswissenschaften)
- 13)Hölderlin „Brod und Wein“ 6.Str. V.107-108: Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe (=StA) im Auftrag des Württembergischen Kultministeriums. Kohlhammer. 1946-77. Bd.2. S.93.
 Oder er kam auch selbst und nahm des Menschen Gestalt an
 Und vollendet' und schloß tröstend das himmlische Fest.
- 14)„Brod und Wein“ 6.Str. V.105-106: StA 2. 93.
 Warum zeichnet, wie sonst, die Stirne des Mannes ein Gott nicht,
 Drückt den Stempel, wie sonst, nicht dem Getroffenen auf?
- 15)„Brod und Wein“ 4.Str. V.55-56: StA 2. 91.
 Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle,
 Also ist wahr, was einst wir in der Jugend gehört?
- 16)„Brod und Wein“ 6.Str. V.91-92: StA 2. 93.
 Und nun denkt er zu ehren in Ernst die seeligen Götter,
 Wirklich und wahrhaft muß alles verkünden ihr Lob.
- 17)Klopstock „Der Messias“ I. 8-9 in den „Bremer Beiträgen“(1748): Werke und Briefe. Historisch-Kritische Ausgabe. Berlin. Gruyter. Abt. Werke. IV. Der Messias. Bd.4. Apparat(I-V.Gesang). 1984. S.4.
 Aber, o Werk, das nur Gott allgegenwärtig erkennt,
 Darf sich die Dichtkunst auch wohl aus dunkler Ferne dir nähern?
- 18)Schiller. Brief an Goethe(23.8.1794): Werke. Weimarer Nationalausgabe (=NA). Bd.27. 1958. S.25-26.
 „Nun da Sie ein Deutscher gebohren sind, da Ihr griechischer Geist in diese nordische Schöpfung geworfen wurde, so blieb Ihnen keine andere Wahl, als entweder selbst zum nordischen Künstler zu werden, oder Ihrer Imagination das, was ihr die Wirklichkeit vorenthielt, durch Nachhülfe der Denkkraft zu ersetzen, und so gleichsam von innen heraus und auf einem rationalen Wege ein Griechenland zu gebären.“
- 19)Hölderlin. Br.172 an den Bruder(1.1.1799): StA 6. 304.
 „Kant ist der Moses unserer Nation, der sie aus der ägyptischen Erschlaffung in die freie einsame Wüste seiner Speculation führt, und der das energische Gesez vom heiligen Berge bringt.“
- 20)Kant „Kritik der reinen Vernunft“ 1.Aufl. 1781. Vorrede: Werke. Akademie-Textausgabe. Berlin. Gruyter. 1968. Bd.4. S.9.
 „Unser Zeitalter ist das eigentliche Zeitalter der Kritik, der sich alles unterwerfen muß. Religion durch ihre Heiligkeit und Gesetzgebung durch ihre Majestät wollen sich gemeiniglich derselben entziehen. Aber alsdann erregen sie gerechten Verdacht wider sich und können auf unverstellte Achtung nicht Anspruch machen, die die Vernunft nur demjenigen bewilligt, was ihre freie und öffentliche Prüfung hat aushalten können.“
- 21)„Kritik der reinen Vernunft“ 2.Aufl. 1787. Vorrede: Werke. Bd.3. S.11-12.
 „Bisher nahm man an, alle unsere Erkenntniß müsse sich nach den Gegenständen richten; ... Man versuche es daher einmal, ob wir nicht in den Aufgaben der Metaphysik damit besser fortkommen, daß wir annehmen, die Gegenstände müssen sich nach unserem Erkenntniß richten, ... Es ist hiemit eben so, als mit den ersten Gedanken des Copernicus bewandt“
- 22)Kant „Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?“: Werke. Bd.8. S.35.
 „Aufklärung ist der Ausgang des Menschen aus seiner selbst verschuldeten Unmündigkeit. Unmündigkeit ist das Unvermögen, sich seines Verstandes ohne Leitung eines anderen zu bedienen. Selbstverschuldet ist diese Unmündigkeit, wenn die Ursache derselben nicht am Mangel des Verstandes, sondern der Entschliebung und des Muthes liegt, sich seiner ohne Leitung eines andern zu bedienen. Sapere aude! Habe Muth dich deines eigenen Verstandes zu bedienen! ist also der Wahlspruch der Aufklärung.“

QUELENNACHWEIS

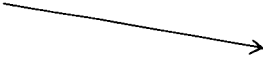
[I] EINLEITUNG

- 1) Fichte „8. Rede an die deutsche Nation": Werke. Auf der Textgrundlage der Gesamtausgabe (1845-46. 8 Bde). Berlin. Gruyter. 1971. Bd. 7. S. 379.
„obwohl es wahr ist, dass die Religion auch der Trost ist des widerrechtlich zerdrückten Sklaven, so ist dennoch vor allen Dingen dies religiöser Sinn, dass man sich gegen die Sklaverei stemme, und, so man es verhindern kann, die Religion nicht bis zum blossen Troste der Gefangenen herabsinken lasse. Dem Tyrannen steht es wohl an, religiöse Ergebung zu predigen, und die, denen er auf Erden kein Plätzchen verstatten will, an den Himmel zu verweisen; wir ändern müssen weniger eilen, diese von ihm empfohlne Ansicht der Religion uns anzueignen, und, falls wir können, verhindern, dass man die Erde zur Hölle mache, um eine desto grössere Sehnsucht nach dem Himmel zu erregen."
- 2) Schütz (1585-1672) „Matthäus-Passion" (1665-66)
- 3) Bach, J. S. (1685-1750) „Matthäus-Passion" (1729)
- 4) Bach „Matthäus-Passion" Urtextausgabe auf der Grundlage der „Neuen Ausgabe sämtlicher Werke", hrsg. vom Johann-Sebastian-Bach-Institut Göttingen und vom Bach-Archiv Leipzig (Serie II. Bd. 5) Kassel. Bärenreiter-Verlag / Ongaku-no-Tomo=Sya. 1973 / 1976. Nr. 17 (BWV) Rezitativ. S. 51-52.
„Evangelista: Da sie aber aßen, nahm Jesus das Brot, dankete und brach und gabs den Jüngern und sprach. Jesus: Nehmet, esset, das ist mein Leib. Evangelista: Und er nahm den Kelch und dankete, gab ihnen und sprach. Jesus: Trinket alle daraus; das ist mein Blut des neuen Testaments"
- 5) Luther: Biblia/das ist/die gantze Heilige Schrifft Deudsch. Wittemberg. 1534. Faksimile-Neudruck: Leipzig. Foerster. 1935. Reclam Universal-Bibliothek. 1983. 2 Bände. Bd. 2. „Das Neue Testament" S. 20 (links).
„Da sie aber assen/nam Jhesus das brod/dancket/vnd brach/vnd gabs den Jüngern/vnd sprach/Nemet/esset/das ist mein leib. Und er nam den kelch/vnd dancket/gab jnen den/vnd sprach/Trincket alle draus/Das ist mein blut des neuen Testaments/"
- 6) Denzinger/Schönméttzer: Enchiridion Symbolorum definitionum et declarationum de rebus fidei et morum. Freiburg. Herder. 1976 (36. Aufl.) S. 364-365.
„orthodoxorum Patrum exempla secuta, omnes libros tam Veteris quam Novi Testamenti, cum uniusque unus Deus sit auctor, pari pietatis affectu ac reverentia suscipit et veneratur." (1501: 8. Apr. 1546)
- 7) „Enchiridion Symbolorum" (op.cit.) 1506. S. 365: 8. Apr. 1546.
„statuit et declarat, ut haec ipsa vetus et vulgata editio, quae longo tot saeculorum usu in ipsa Ecclesia probata est, in publicis lectionibus, disputationibus, praedicationibus et expositionibus pro authentica habeatur, et quod nemo illam reicere quovis praetextu audeat vel praesumat" (Decretum de vulgata editione Bibliorum etc.: Conc. TRIDENTINUM)
- 8) „Enchiridion Symbolorum" (op.cit.) 2710. S. 545: Epistula ad archiep. Mohilovensem. 3. Sept. 1816. De versionibus s. Scripturae.
„Porro Romana Ecclesia solam Vulgatam editionem ex notissimo Tridentini Concilii praescripto suscipiens, aliarum linguarum versiones respuit"
- 9) Biblia Hebraica Stuttgartensia. Württembergische Bibelanstalt. 1969. Stuttgart. Deutsche Bibelstiftung. 1977. „Liber Genesis" S. 15.
„Erat autem terra labij unius, & sermonum eorumdem." (Caput XI. 1)
(Biblia Vulgatae Editionis. 2 Bde. Antverpiae. Verdussen. 1715. Bd. 1. S. 9)
„ES hatte aber alle welt einerley zung vnd sprache/"
- 10) „Enchiridion Symbolorum" (op.cit.) 1854. S. 424. IV. Regula Tridentina de libris prohibitis. 24. Mart. 1564.
„Cum experimento manifestum sit, si sacra Biblia vulgari lingua passim sine discrimine permittantur, plus inde ob hominum temeritatem detrimenti quam utilitatis oriri"

„daß das deutsche Herz in solchem Klima, unter dem Seegen dieses neuen Friedens erst recht aufgehn, und geräuschlos, wie die wachsende Natur, seine geheimen weitreichenden Kräfte entfalten wird“ (II(3)21).

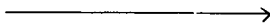
Dieser „lebendigen Ruhe“ in der „wachsenden Natur“ des deutschen Geistes mit ihren „geheimen weitreichenden Kräften“ entspricht der dynamische Rhythmus zu Anfang der Gedankenlyrik:

Rings um ruhet die Stadt;



Dieser sinkende Tonablauf, durch den die Dämmerung nicht nur die ruhige Stimmung des Abends, sondern auch noch den Nachklang des lebhaften „Tags“ (V. 3) widerspiegelt, wird noch deutlicher in einem Vergleich mit dem horizontalen Tonverlauf im Beginn von Goethes „Wanderers Nachtlied“ (1780): (II(3)10):

Über allen Gipfeln
Ist Ruh,



Dem ebenen Klangbild entspricht hier der statische Charakter einer feststehenden Gebirgswelt, während der dynamische Tonverlauf von „Brod und Wein“ den zur Ruhe führenden Ablauf der Abenddämmerung in der städtischen Menschenwelt zum Ausdruck bringt.

Im Beginn von „Wanderers Nachtlied“ entsteht eine mächtige Stille: „das absolute Silentium (the perfect stillness)“ (Wilkinson: II(3)11) im menschlichen Bewußtsein, die am Ende dieser Naturlyrik in den endgültigen Stillstand des menschlichen Daseins ausmündet: „Warte nur, balde / Ruhest du auch“ (V. 7–8) d.h. „Bald kehrst du wieder zur Erde, aus der du geboren bist!“. Und der alte „Goethe überlas diese wenigen Verse, und Tränen flossen über seine Wangen“ (II(3)13). Denn solch „un silence absolu porte à la tristesse. Il offre une image de la mort“ (II(3)12). Diesem todesnahen „silence absolu (perfect stillness)“ setzt der alte Rousseau indes den „Zu- und Abfluß (flux et reflux)“ (II(3)14) des Bielersees vergleichend entgegen, was auch die „inneren Bewegungen (mouvements internes)“ der menschlichen Seele widerspiegelt, die sich auf „die höchste Seligkeit (la suprême félicité)“ konzentrieren; wohl ähnlich wie das „Seelige Griechenland!“ (I. 15) im Vers 55 der vierten Strophe von „Brod und Wein“. Gerade von solchen „mouvements internes“ zeugt lebhaft die „lebendige Ruhe“ des gedankenlyrischen Anfangs.

Sicherlich fuhren solche „Wagen“ damals in der abendlichen Dämmerung zu luxuriösen Abendgesellschaften, zwar z. B. zum Lusthaus der Oper (III(3)10).

Während diese „mit Fakeln geschmückten“ „Wagen“ der schmuckvoll gekleideten Haute-volée über die Straße „hinwegrauschen“, „gehn“ die städtischen Bürger „heim“, also zu Fuß, wie noch die Handwerksgesellen, wenn auch auf „erleuchteten Gassen“, um „wohlzufrieden zu Haus“ „zu ruhen“:

Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
Wohlzufrieden zu Haus;
(„Brod und Wein“ 1. Str. V. 3–5 : II(1)2)

Der Gegenüberstellung einer anspruchslosen „Erleuchtung“ der „Gasse“ mit einer prächtigen Beleuchtung durch „Fakeln“, entspricht hier der Kontrast der Örtlichkeit: der engen „Gasse“ steht eine breite Straße gegenüber, auf der nicht nur ein Wagen, sondern eine ganze Reihe von „Wagen hinwegrauschen“.

Die „Erleuchtung“ durch Lampenlicht verbreitet zwar nicht so viel Helligkeit wie die „Fakeln“, aber sie durchdringt ja im Verein mit dem Mondschein das Innere der ruhenden Stadt und gelangt so auch durchs Fenster zum in der „Antigonä“ und dem „Symposion“ lesenden Dichter. Der Mondschein wirkt nicht auffällig wie die „Fakeln“, sondern „ruht, wie ein stiller Gott auf dunkler Wolke, verborgenwirkend über seiner Welt mit freiem Auge (III(2)17). Ähnlich wie in Beethovens Mondscheinsonate bildet sich in der „Erleuchtung“ ein Einheitserlebnis zwischen dem Innenraum der Seele und dem Außenraum der in der Natur eingebetteten Stadt im ersten Vers von Hölderlins „Brod und Wein“ heraus. Im Einklang mit dem bescheidenen „Werden“ dieser „Erleuchtung“ (V. 1) wächst sich das sich langsam ausprägende Bürgertum heran, dessen „sinniges Haupt“ (V. 4) „wohlzufrieden zu Haus“ (V. 5) ruht und sich ganz weit von den bunt ausgeschmückten Abendgesellschaften und Opern der feudalen Kultur des 18. Jahrhunderts entfernt und in die Zukunft blickt.

Dieses „Werden“ eines „erleuchteten“ Bürgertums im ruhig dahinflutenden und wieder verebbenden Distichon des gedankenlyrischen Anfangs vollzieht sich bemerkenswerterweise im Einklang mit dem „Vergehen“ der symbolischen „Wagen“ der privilegierten Gesellschaft der feudalen „Tirannenknechte“ (III(3)23), die noch ganz im Bann der bourbonischen Pariser Kultur der Oper steht: „Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg“ (V. 2):

Dieser Untergang oder Übergang des Vaterlandes (in diesem Sinne) fühlt sich in den Gliedern der bestehenden Welt so, daß in eben dem Momente und Grade, worinn sich das Bestehende auflöst, auch das Neueintretende, Jugentliche, Mögliche sich fühlt.

(Hölderlin „Das Werden im Vergehen“ : III(1)5)

Diese „Gährung und Auflösung“ (III(3)24) im stillen Stadtmilieu von „Brod und Wein“ geben „Ruhe, nicht die leere, sondern die lebendige Ruhe, wo alle Kräfte regsam sind, und nur wegen ihrer innigen Harmonie nicht als thätig erkannt werden“ (II(3)22), so

VERINNERLICHUNG UND ERLEUCHTUNG
ÜBER DIE ERSTE STROPHE VON HÖLDERLINS „BROD UND WEIN“ :
„HEILIGE NACHT“ ERSTER TEIL

TAKAHASHI, Katsumi
(Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät)

INHALT

(I) EINLEITUNG	S. 2 – S. 5
(II) „RINGS UM RUHET DIE STADT“	
(1) Stabreim und Versfuß	S. 6 – S. 7
(2) Verinnerlichung	S. 8 – S. 11
(3) „Die lebendige Ruhe“	S. 11 – S. 15
(III) ERLEUCHTUNG UND BELEUCHTUNG	
(1) „Das Werden im Vergehen“	S. 16 – S. 17
(2) Lampenlicht und Mondschein	S. 17 – S. 22
(3) „Gährung und Auflösung“	S. 22 – S. 28
QUELENNACHWEIS	S. 28 – S. 44
Zum Verständnis dieser Arbeit	S. 45 – S. 47

ZUM VERSTÄNDNIS DIESER ARBEIT

Das Jahrhundert vor der Entstehungszeit von „Brod und Wein“ (1800-01) nennt man auch das „Siècle des Lumières“. Dieses Aufklärungszeitalter stellt man sich ja gern mit Abendgesellschaften für Privilegierte mit prunkvollen Kronleuchtern und kostbaren Wachskerzen vor, wie in der „Opéra de Paris“ (III(3)19) oder am „Hofe von Versailles“ (III(3)21). Aber im Lebensraum der bürgerlichen Stadtbewohner leuchtete eher bescheiden im alten Stil sanft schimmerndes Lampenlicht am Fenster:

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
 („Brod und Wein“ 1. Str. V. 1 : II(1)1)

Im Gegensatz zu dieser „stillen“ „Erleuchtung“ der Fenster, hinter denen sich Hölderlin in seinem Zimmer z. B. ausgiebig mit der Tragik der „Antigonä“ und der Philosophie vom „Symposion“ befaßte, steht die prächtige Beleuchtung durch mehrere „Fakeln“, welche die verschiedenen „Wagen“ schmückten:

Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
 („Brod und Wein“ 1. Str. V. 2 : II(1)1)

